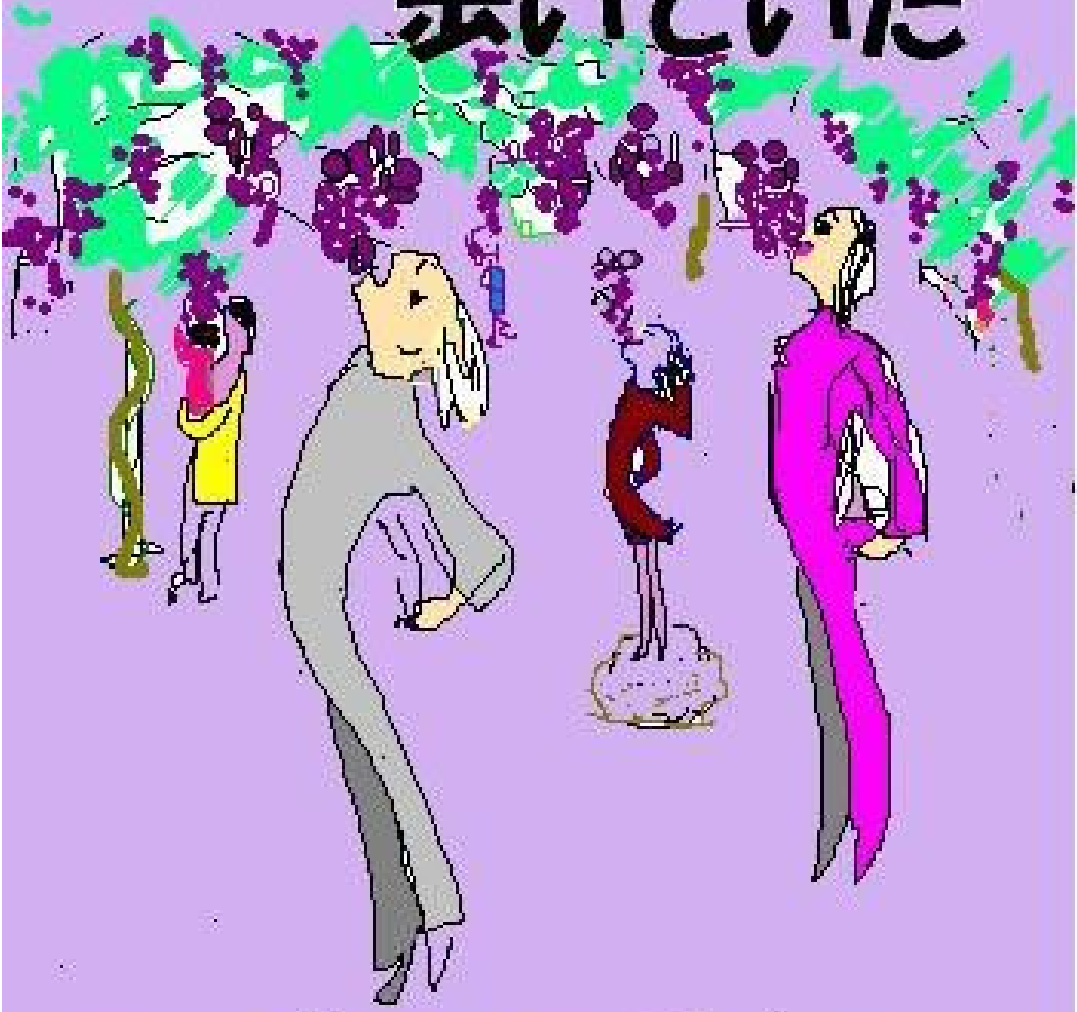
雲の上を歩いていた



島さち子

雲の上を歩いていた

装画　島さち子

雲の上を歩いていた

産毛とバターのような脂肪に覆われた僕の子供が、羊膜を押し破り、羊水の流れに乗って、狭い路地から、この世にグィッと身を伸ばしたとき、ああ、これが天の采配なんだと解ったよ。生命って大したものだよ。僕はまだあのときの興奮を鎮めることが出来なくて、雲の上を歩いている。

母体のなかで二四〇日、とぐろを巻いていた胎児が、医師の手に導かれて、この世に震えながら姿を現わし、喉の羊水をピペットのようなもので吸引され、始めての呼気とともに、しわがれた挨拶を送ってきた時の喜びを、僕は決して忘れない。午前十時二十五分、僕の分身が誕生した。女の子、その手足に指が五本ずつついていた。人並であるだけでこんなに嬉しいものだとは思わなかったな。

出産に立ち会ってほしいとメイが言い出した時、僕は何とか逃出したくて、言い逃れを探したくらいだった。

「私は絶対、自然分娩にするわ、まやかしのない産みの痛みを母親である証拠として、体験してみたいの。だから、どんなにわたしが苦しんでも、麻酔を頼んじゃ嫌よ」

誰もが苦しみを避けたいと考える時代に、メイが何故麻酔を嫌ったのか解らない。僕が出産に立ち合わずにいられなくなったのは、子供の誕生が予定日より一ヵ月半も早くなった為、彼女が死ぬんじゃないかと怖れたからさ。心配が杞憂に終り、僕は彼女への感謝で一杯だよ。メイ！　きみと僕の娘、名前はマリア、五ヵ月考えた名前だ。オチビチャン、パパが行くまでオッパイに吸いついておいで。

薬品臭の漂う病院の廊下を、行き交う白衣やガウン姿をかわしながら、産婦人科12号室へ。

「トントントン、僕だよ、トントン、僕ですよ。新米のパパですよ」

自分の言葉に赤面しながら、ドアに手を掛けたままひと呼吸。彼女の笑い声が聞こえた。ドアを開けると、ベッドの体の膨らみが、枕より上まで連なっていた。それで、隠れんぼのつもりなの。僕は抱えていた花束ごとメイを抱きしめる、彼女はベッドカバーの下で暖かくふんわりと和らいでいた。

「痛みは取れたかい！　疲れは……」

「あれぇ！」力を込めると、彼女の体の芯までふにゃふにゃになった。血相を変え掛布団を捲り上げる。掛け布団と一緒にトップシーツが舞い上がり、ピロケースからはみ出したベージュ色の枕と、棒

状に巻いた毛布が、ベットに連結して横たわっていた。
「こりゃ、なんだ！　僕を驚かそうってのかな？　何か面白い趣向でも思いついたか？」
見回すが、メイの姿はない。掌を滑らせても、ベッドは冷え切っている。こんな悪戯をしてメイは何をしているのだろう？　ドアの影から、廊下、売店、外来、洗面所……、走り回っても何処にもいない。
屋上に駆け上がった。そこにも白茶けたコンクリートの無愛想で荒々しい肌が、僕の傷ついて弱々しくなっている心を逆撫でする。
検査や処置があって、レントゲンや心電図をとっている可能性もあるな。僕が病室を出るのと、彼女が帰るのと行き違いになったのかもしれない。そうだ、そんなところさ！
病室に舞い戻る。無人！　ロッカーを開けて見た。大型バッグが一個あるだけ、彼女の着替えや靴は見あたらない。バッグの中には新生児の着替えの他に編物の本と毛糸玉、白い毛糸玉に編み棒が突きささり、中から紙片がはみ出している。……何じゃ、これ？
毛糸玉を手にとり、玉の中心から出ている糸を引っ張ると、縺れの中から、折りたたんだ封筒が出て来る。ブルーの小型封筒、シャープペンシルの掠れた文字、「ケン様へ」と書かれている。こんな仕掛けするなんて、メイも何考えてんだか？　へんなやつ。
「びっくりしないで下さい。黙って来ましたが、私はここ一年近く、記憶を喪失していました。過去

を無くしていたんです。でも、神様はなんという悪戯をなさるのでしょう、出産の地獄のような苦しみの中で、失っていた記憶が、徐々に甦って来たのですから。うっすらと、次第に悪夢のように。漸く産み終えて、目を開いた時、貴方の顔が、全くの、赤の他人の顔に見え、恥ずかしさで胸が潰れる思いでした。

だって、私には夫がいるのです。記憶が戻っても尚貴方の愛情を信じて白状致します。私は、殺人を犯して警察に追われている身です。ですから、私を探さないで下さい。赤ちゃんのこと、お願いします」

くしゃくしゃになったブルーの紙の皺を伸ばし、狐につままれた思いで、文面を見つめる。何度も、何度も……。まさか？　そんなことが、あってたまるかよ！

肩下がりの左手で書く文字は、筆圧が低くて弱々しい、間違いなく彼女の文字だ。

殺人犯だって？　なんという悪戯！　僕をこんなことで、担ぐ気なんだ？　でも、何故そこまでして……。何が残る？　笑っちゃうよ、まったく。

記憶喪失だって？　メイの言葉は豊富だったし、思慮深かったじゃないか。思考は言葉でするし、言葉は思考そのものじゃないかあ。

……ただちょっと……気になるのは……出産の時、僕は彼女の手を握っているしかなかったのだが……、あれは、確か強い陣痛の来たときだった。メイは突如、乱暴に僕の手を払い除け、分娩台の柵

に掴まった。先生がそうするように合図したのかと思ったが、あの瞬間だったのかもしれない、記憶が甦ったのだとすれば……。

出産直後のメイは蒼ざめて、何も言わずに黙っていたが、表情は和らいで美しかった。あの軟らかな細い手で、あの優しい心で殺人なんか出来るもんか。冗談は休み休み言って貰いたいな。嘘だろう！

「心の中は満ち足りているのに、何処かにぽっかり空洞があるみたい！」などと、言っていたことは、確かにあったな。あんなとき、妊娠して食欲旺盛になっていたから、食べ物を要求しているんだとばかり思って、スーパーに走ったものだったが……。僕は、幸福の絶頂にいる思いで、すべてを見落としていたのかもしれない。……でも冗談だろう？　冗談だと言ってくれよ！　しかし、冗談だとしても、カゲキ過ぎはしないか？

どうしていいかわからず、ナースセンターの前で逡巡していると、談笑中の看護師が見咎めた。

「由川さんですね、お産は病気でないにしても無断外出されては困ります。奥様には、まだ処置があるのに危険過ぎるじゃありませんか」

「普通に歩いてはいけないんですか？　いけないんですよねえ。すみません」

何時姿を消したのか聞きたかったが、メイが書き残したことの意味も分らず、うろうろするばかりだ。

「そうですよ……。あまりお帰りが遅いのでお宅にお電話をしてみたのですけれど、お戻りじゃない

みたい、お留守でした……」
「そ、そう……留守でしたでしょう。僕は此処に来ているのだから……」
「ああ、そう言うことになりますわね。昨晩、9時に巡回したときは、確かにいらしたんですよ、その後はベッドが膨らんでいたので、朝まで騙されていたのかもしれません。いなくなられたのは、今朝なのか、昨晩なのか……」
無責任過ぎると言いたいところだが、怒るわけにもいかない。
「赤ん坊は？」
「赤ちゃんは新生児室でしっかりとお預かりしておりますよ。ですけど、母乳も与え始めななければならないし。一ヵ月半早く生れたとはいっても、十ヵ月で生れた赤ちゃんと同じくらいの成長をしていらっしゃるんです。奥さますぐお帰りだと思っておりましたのに困りますね。お心当たり、本当にないんですか？」
「ああ、はい。子供がいるんだから、必ず帰って来ますよねえ？」
無防備に僕の心配が飛び出していく。
「まだ、お若いから……急にご実家のお母様に会いたくなられたのかも……」
「ああ、そ、そうですよ、た、たぶん、そ、そうかも……」
どうしていいかわからず、僕の口があわてている。

両親とうまくいかず家出したということ以外、僕が彼女についてどれだけ知っていたと言うんだ。彼女は話したがらなかったし、僕も嫌がることには触れないようにしてきた。もう少し優しくしてあげれば全部話してくれていたかもしれないのに、悔やまれるな。いや、優しくしたさ、記憶喪失なんだぜ、何が話せたっていうんだよ。

記憶喪失だっていい、殺人犯だっていい、必ず探し当てて、いや、探さなくたって帰ってくるよね。メイを僕は絶対守ってあげるさ。

それにしても、子供まで生れたのに、他に夫がいたなんてあるかよ。失踪！　蒼ざめてしまう。

僕らの愛はこの程度のものだったのか？　哀しいなあ、泣けるなあ。何故話してくれない？

急いで、新生児室に行ってみた。ガラス越しに、二列に並んだベッドの左から二つ目、真っ白い毛布に包まれた赤黒い小さな顔、膨れた瞼が半眼に開いて、こちらを見ている。水泡のように浮きあがった山形の唇を小さくすぼめた。生きている。ほんのちょっとの間に気品のある顔になったな。これなら、メイに生き写しになりそうだ。

産まれるとき、はじめ皮膜に覆われた黒い頭が出たり入ったりしてね、僕がノッペラボーの顔に恐怖すると頭はシャボン玉のように破裂し、銀色の液に乗って、今度こそ本物の頭が送り出されてきたんだ、紛れもなく、僕の目の前で、メイは僕の子供を生んだんだよ。僕はそれを見ていたんだ。

その証拠にお産の間中、僕についていて欲しいといったのは、メイだったじゃないか。そうさ、子

供の親でもない男にそんなことを女が頼める筈がないよ。いくら、記憶が失われていたとしても、妊娠し出産したことは、それ以後の現実だったのだから。その記憶まで失われる筈はない。

来るときはあんなにウキウキし、幸福で地に足がつかなかった病院の廊下を、僕はしょぼくれ、足枷をつけられた囚人のように、重い足を引きずって、のろのろ歩いて外に出た。

「婚姻届をまだ出していなかったって、いうの？」

家に駆けつけた叔母が声を荒げた。

「ああ、箪笥の中をかき回したら、婚姻届が出てきたんだ。メイは自分の戸籍謄本が届き次第、区役所に持っていくと言ってたんだよ。僕は出産費用を稼ぎ出そうと、超過勤務を続けていたからね。彼女任せにしていたさ。手続は終わったものとばかり思ってたよ」

「婚姻届に戸籍謄本などいらないのに、何いってるの？　まあ！　なあに、これ、メイの欄、何ひとつ記入されていないじゃないの」

叔母に渡した婚姻届の用紙が乾いた音を立てた。メイが記憶喪失だったと書置きしたことは話した

が、殺人犯であること、夫がいたことなど、叔母には話していない。
「つまり、貴方はメイに……」言って叔母は口ごもる。……捨てられた……。そういいたいのだ。
「可哀想に貴方は子供の誕生を待ち望み、メイのお腹に耳を当てて、子供の心音を聴いていたわね」
「メイは悩んでいたのかも知れないな。記憶喪失だったのに、僕は幸福に酔い、有頂天になっていたから気が付かなかったのかなあ」
「賢は、騙されていたのかもしれないわ。メイは優しそうだったけど、初めから結婚する気なんかなかった。子供は予定日より六週間早く生れたといっていたわね、考えたくないけれど、父親のわからない子供をゆっくり産むために貴方は利用されたのかもしれない。記憶喪失なんて、滅多にあるもんじゃないし、それなら、もっと、ぼうっとしているか、いらいらしているか、どちらかでしょう。変な話ね」
「女が子供の親でもない男に、お産に立ち会わせる筈がないさ。メイは陣痛が酷かったから、頭が変になったんだよ、きっと。ほんの少し早く生れてきただけの話じゃないか。そんなこと、よくあることさ！　叔母さんは、メイが、一ヵ月半か二ヵ月を、故意に隠して、本当は十ヵ月で生んだのに違いないと言いたいの？　そんなことはないよ。彼女はそんな計算のできる質ではないんだから……」
　僕は声を張り上げ唇を噛んだ。
「貴方も両親を早く失ったし、どうしてか、いい男なのに相手に恵まれなくて。三十四にもなってし

まったんですものね。お互いに過去を話したくない気持も分らないではないけれど、結婚前貴方があまり嬉しそうにしていたものだから、つい立ち入ったことを聞かずじまいにした私も悪かった。貴方がメイを連れてきて紹介した時から不釣合いな気がしてならなかったのよ。あの美貌ですもの……」

今思えば、メイとの出会いは奇妙な具合だったなあ。

滅多にないことだが、あの日、会社の可愛い娘にデートに誘われてな、のこのこ僕は劇場に出かけていったんだ。そしたら、なんてこった、僕の友人に意中を伝えてほしいと依頼されたってわけ。そんなことはまあ関係ないけど、自棄酒飲んでふらふら。だから電車で帰り、何時も通ったことのない跨線橋を渡った。橋げたの上のフェンスが大きく破れていてね、下の線路が見えていた。ということは誰かがここから飛び込んだ証拠。

僕が顔を上げると、暗い空には天の川が輝き、周囲が１８０度ゆらゆらと揺れ動いていた。酔っ払ったな。そう思った時、夜霧の向うで呼応するように、光が揺らぎ、あっと思う間に電車の巨大な顔が！　僕の真正面に迫っていた。

酔眼には衝撃だったな。思わず身を引いた時、目の端に、なにか白いものが風に靡くのをみたんだ。改めて見渡しても人影も小鳥の影も見えない。気のせいだったのかと階段を降りかけると、踊り場に白い羽をひろげて白鳥が倒れていた。僕が近付くと、白鳥は自力で起き上がろうとした。起き上がろうとしても、起き上がろうとしても、痛みがあるのか悲鳴を上げながら、膝からがくっと崩折れてし

まう。

見かねて僕が肩を貸すと、柔らかい腕を僕に委ねて片足でひょこひょこ歩いた。タクシーを拾って病院の前で降ろした。白鳥は「保険証がないの、いいわ、冷すだけでも何とかなると思います」と言い張ったが、僕が、医療費を負担し、包帯で痛々しい白鳥を気遣い、アパートまで送っていった。それがメイだったんだ。その翌日も、その翌々日も、その翌々々日も、彼女を気遣い、何時の間にか僕の家で二人は身を寄せ合って生きていたというわけ。仕事から帰宅する僕を飛び出して迎える、彼女の、あの、はしゃぎぶり。彼女が僕の口に、僕が彼女の口に夕食を運び、朝の新しい陽光に縁取られた彼女がいて、そのお腹に耳を押し当てると、腸の蛇動や血液の音に混じって、胎児語ってものが聞こえたよ。妊娠とわかった時、もう五ヵ月が過ぎていたんだ。浅く、浅く、早く、早く、ハー、ハー、ハー。出産のリハーサルを一緒にやったさ。

「賢……あんた、さっきからポケットを上から掴んで、がさごそいわせているけれど見せてごらん」

「ポケットの中には何もない、只の紙屑ですよ。書置きは焼き捨ててしまったさ」

いけない。僕は子供のときから、大事なものを握り緊めている癖があるんだ。

「もっとこっちに顔をむけて、書き置き、お出しなさい！　はい！　私に見せなさい！」

僕はこの運命の激変に耐えて、叔母を睨んでいた。自分では分らないが、あの度胸のいい叔母が、顔色を失って縮みあがった。

「僕がメイに捨てられたって！　言ってくれるじゃん！」
ふたりは長い間、押し黙っていた、叔母は僕より一足先に顔を和らげ、何ごともなかったように、お茶を啜った。
「……一応、警察に保護願いを出して来ましょうか。子供がいることだし……。出生届はどうなるの」
「住民票も戸籍もない人を、探してくれる程警察は暇じゃないよ」
言ってから、僕は大きく首を横に振った。
メイが本当に殺人犯だったら警察の世話になれる筈ないじゃないか。それだけは勘弁してくれ。僕の愛情を信じて、こんなに重大な事実を打ち明け、書き残したのだから……。

何でもいい、僕は食いついていく。メイがいそうな方向に、一目散に。生命の不思議さを、生の感動を僕に与えてくれたメイを、この手に取り戻すためには、なんだってやる。メイなくして僕の人生など考えられなかった。ましてマリアがいるんだよ。僕達のマリアが……。
メイは僕と出会う前、横浜のメモリーとかいう、喫茶店のウェイトレスをしていたが、雰囲気が悪

いので止めたと言っていた。行ってみればヒントが得られるかもしれない。記憶喪失になったという九ヵ月前がわかれば、メイが何者かが判明し、行方もわかって来るさ！

「履歴書はありますが、みんな嘘っぱちでした。住所も、本籍も、みんな嘘。ちょっといない程の美人だから、僕も惜しいと思って探し回ったが、手懸りは全くなし！」

マスターの銀色のマニキュアをした指が、僕の鼻先でオーバーに閉じたり開いたりしていた。

「親しい友達には、実家は広島だと言っていましたよ。まあ、それも嘘っぱちでしょうけど。うちでは住民票を提出させたりはしませんからね。ふっと現われて、ふっと姿を眩ますお嬢さんも時にはいます。ところであんた何者です？　名刺くらい渡したらどうです！」

マスターの手が僕の腕をつかんだ。何ともいえぬ、ぬめぬめとした冷気が舞い上がる。細面、はれぼったい瞼、けちな瞳孔。

「怪しいものじゃありませんよ。申し遅れました。メイの夫です。結婚し、子供も出来たんです」

マスターは暫く僕を睨みつけていたが、にやっと笑みを浮かべた。

「子供を残して逃げられたか？　ははははは、は。そうだろうな、逃げられたか？　そうか。それは、災難だ。その顔で、無理もないがな。ははははは、は。そうだなあ、此処にメイを連れてきたのは、駅前に時々店開きする植木屋のおばさんだったよ。伊豆からきたと言ってたが、メイが来た直後から見かけなくなった。メイの名前は、伊豆から来たから伊豆メイ、そんな所でないかあ！」

僕はもっと聞き出したかったが、マスターは接客用の笑顔を作るとカウンターに戻った。その植木屋を探すしかないのだが、駅前はすっきりしていて、露店など何処にも存在しない。

僕は失望して家に帰り、疲労した足から靴下を剥ぎ取ると、派手に素足を投げ出した。素足は植木台を跳ね飛ばした。慌てて、引っくり返ったシクラメンの鉢を抱き起こした。

「いい香りでしょ、シクラメンではこんなに薫るのは珍しいのよ」

と、この鉢と、旅行鞄一つ持ってメイは僕の処にお嫁に来たのだ。

もはや枯れて、ピンクの花びらも葉も萎えてはいるが、覗き込むと、枯葉の重なりの蔭に汚れたカードが埋もれていた。

「シクラメン、ピンク、××園芸」

水にさらされ、消えかかっていて、××のところが見えなくて、更に下段に住所か電話番号らしきものが薄れていた。

これが解れば、……。　ようし！　僕は家を跳び出した。突撃開始だ！

「また来たのか。しつっこいなあ。植木鉢だって？　此処のところ、あのおばさんは姿を見せないと、言っただろうが！　あんた風情に、メイの心が捕らえられる筈はないさ。悪あがきしても、どうにもならんよ！」

メモリーのマスターは、僕を鼻であしらっている。僕は店内の植木鉢につぎつぎ駆け寄っては、顔

を逆さ吊りにして覗き込んだ。三つの植木に月田園芸のカードが差し込んである。
月田園芸、これしかないな。幸い住所が希望のようにくっきりしていた。
「植木には耳も口もないんだよ。メイが植木鉢のなかに隠れているとでも思っているのか？　植木蜂のなかで暮らそうなんて思うなよ。何しているんだか？　逃げられたんなら、潔く諦めるんだな！　何時までも、みっともない！」
「貰っていくぜ！」
僕は素早く、カードを引き抜いてポケットに突っ込んだ。
右手、ゴルフ場の緑の濃淡を光が潜りぬけていく。トーナメントのギャラリーが、騒音を引き連れて移動していた。
シュロとビンロウジュの向こうに、温室が連なって見え、青い三角屋根と月田園芸の大看板が見え、ブルージーンズの若い女が走り出てくる。
「わたしも二三回は、行商をしたことありますけど、何か？」若い女はあからさまに、僕に好奇の目を向ける。
「もっと、その、年配の……」
「それはうちのお婆ちゃんだわ。お婆ちゃんが出ていたのは、もう一年近く前になりますよ。病気で亡くなった後、わたしがちょっと出たことは、ありましたけど……」

「亡くなられた、……それは……どうも……その……伊豆メイという女についてご存じないかと思いまして……」
「伊豆メイ？　メイさん！　メイさんですか？　今何処なんです？　何処にいるんです？」
この女はメイと面識がある、とうとう僕の知らないメイ、過去のメイに辿りついたのだ。女は僕の名刺に目をやっている。
「僕ら夫婦の間にトラブルがあったわけではない、愛し合っていたのに、お産のあと、赤ん坊を置いたまま彼女は雲隠れしてしまったんです」
女は驚き、立話を止め、僕を事務所に招き入れた。カトレアが南国の蝶のように豪華に咲いている割には乱雑な部屋だ。
「こちらに立ち寄りませんでしたか？　他にメイの行きそうな場所をご存じありませんか？　何でもいい、些細なことでもかまいません、彼女に関係あることを教えて下さい。メイはこの辺で生まれ育ったのですか？」
「ご主人が、何故そんなことを他人に、お尋ねになるんですか？　メイさんが、ほんとに結婚したなんて、子供までできたなんて信じられない？　メイさんの弱味につけこんで暴力とか、脅迫で……」
女は立ちすくんで、唇を振るわせている。
「誤解しないで下さい。僕達、愛し合っていましたよ。その証拠に、僕は分娩室に入り出産に立ち会

ったんです。彼女がどうしてもって言うもんで、そう、だから分娩室で、僕はずっと彼女の手を握り続け、力づけていました」

誰だってこのことを聞けば、二人の結びつきの深さを知るだろうさ。

「へーえ！　メイさんがそんなことを？」

女は無愛想に言ったが、僕には、女の表情がやわらいでいくのがわかる。

「私が始めてメイさんに逢ったのは一年ほど前、いや、昨年の九月頃だったかしら。市場からの帰路、家の近くまでくると。見かけない若い女が、ガードレールに取り縋っていたんです。その様子が不自然なので、車を停めると、頭から血を流していて、助けを求めるように私を見るんです。『可哀そう、手当をしてあげるわね』って、家に連れ帰ったんですよ。大した傷ではないみたいでしたが、名前、住所、過去のこと、みんな思い出せないようなんです。医者や、警察にと考えてみましたけど、本人は嫌がるし、マスコミに記憶喪失なんて書きたてられたら、お嫁に行けなくなるよって、みんな言うから、月田園芸は色んな人を受け入れて、大家族でがやがや暮らしていたから、一緒に暮らして暫く様子をみることにしたんですよ。二週間待ったけど、どうしても過去が甦らない、記憶以外は普通みたいだから、相談した結果、回復させるには、此処は刺激が少な過ぎるのではないかということになって、お婆ちゃんが、行商に連れて行き、就職先を決めたんです。就職する時の名前は、伊豆メイ、私が名付け親です。メイさんはわたしの美香と言う名前が大好きだって言っていたから、美のつく名

前、美咲とか、美々にしたかったんだけど。みんなが、二人の区別が出来なくなるって言うものだから、メイに……」
なら本名は？　やはり、記憶喪失だったのか？　脱力していくのがわかる。僕は何故気付かなかったんだ！
「僕と一緒になるときは、まだ、記憶は戻っていなかったわけですが、あの陣痛のショックで何事かが起こったんです」
「何事かって？」
女は息を呑んで僕を見つめたが、急ににっこり笑って部屋の隅に行きお茶を入れて来る。
「メイさんの記憶が戻った、陣痛で？　たぶんそうよ、よかったわ！」
「良かった？　よくないですよ。メイは消えたんですから」
「おうちに帰ったのよ。そうにきまっているわ。……でも以前の記憶を取り戻す変わりに、最近の記憶が消えたって映画見ましたけど……」
「最近の記憶が消えて、僕を忘れるなんて、生れた子供まで忘れるなんて、あり得ませんよ」
「そうよ、きっとそうよ、必ず連絡があるわ。赤ちゃんがいるんだもの」
「すみませんが、メイが此処に現われた日の、正確な記憶はありませんか？」
わかれば殺人事件が何処で起こり、何者が指名手配されているかがわかるのだが？

「あれは、大量出荷の日だったから、調べてわからないことないですけど。帳簿は此処にありませんから後でお電話いたしましょうか？」
「おっと、お邪魔でしょうが、僕はせっぱ詰まっているんですよ。生れて何日もしない泡みたいな赤ん坊が、母乳も呑まないで……」
母乳？　呑んだのかな？　呑まなかったのかな？　それさえ僕にはわからない。
「何か、なにか！」
「そうね、あの日は晴天だったのに、メイの履いていた靴のヒールには泥が一杯付いていました・この辺りには見かけない黒い土で、いったい何処から来たのだろうって考えたものですよ。メイはそんなことご主人に話さなかったんですね？」
「長い間歩いてきたということですか？」
「いいえ、長い間なら、あんなに沢山の土がついている筈がないと思うんです。車できてあそこで投出されたのではないかと」
突然ドアが開いて花の香りが流れ込んだ。振向くと白い花束を抱えた大男が入ってくる。
「美香ちゃん、社長が呼んでるよ。このチンピラはおれに任しとき、ああ何もかも聞こえていたさ」
男は花束を無造作にテーブルの上に投げ出した。美香は操られた人形のように外に出て行こうとする。

「待って下さい。何故逃げるんです。もうちょっと、話して下さい。メイの持物の中に何か過去を語るものは？……逃げるんですか。メイを隠しているからじゃないのか！」
「それはない。壁の向こうで話は聞かせて貰ったよ。メイの旦那だってねえ。子供が出来たってなら強いもんさ！　何も慌てることはないよ」
　男は気休めを言いながら僕をナメクジみたいな気色悪い目付きで嘗めまわす。
「ほんとにメイの旦那かねえ、まあ、どんなカップルもあるだろうが、ふっふっふ……、メイとかいう女、何かうまいこと言っちゃってさ、美香の同情を買い、二週間も居候していたんだ。その後、お婆ちゃんが亡くなっても音沙汰なしだよ。線香一本上げに来ないんだから。恩知らずというもんさ！」
「そうか、美香さんにいろいろお礼言わなきゃいけなかったんだな。悪かった。すみません、色々お世話になって……、いずれ……」
　話が可笑しくなって来ている。
「なんだなんだ、しょぼくれた面はそのくらいにして、ここのところは引下って下さらんか。メイのことは、わかり次第必ずおれから連絡するから……」
　なんでこの男が連絡することになるんだ？　単なる口実に過ぎまい……。
　ヤクザ風の容貌にけおされて、仕方なく車に乗り込むと、ハンドルに凭れかかる。とにかくメイはこの月田園芸に実在したのだ。大変な収穫じゃないか！

美香がサイドミラーに見えた。車から顔を出すと彼女の方から駆け寄ってくる。
「あの日は九月二十五日。いい忘れたけど、一度メモリーのマスターがメイを隠しているんじゃないかって押しかけて来た事があったんです。メイさんの記憶喪失は誰にも内緒にしていましたから、私はその事に触れず、故郷に帰ったんじゃないかって言っておきました。感じの悪い人物だったから彼女が此処に現われた時の経緯なんかは話していません。話したりしません」
美香は本気でメイのことを思いやってか、蒼白の顔になっている。
メイより二三歳は歳上だろうが、思ったよりいい娘だな。それにメイほどではないにしても、チャーミングだ。
誠意を感じて振り返ると、美香は筋肉質だが、しなやかな腕を僕に向かって、大きく振って見せた。

図書館に行き、昨年九月二十五日前後からの一月分ほどの新聞を、全国紙、地方紙、合せて七紙に目を通した。当時の殺人事件で犯人の逮捕されていない事件は表に出ているものでは、なかった。ない。行方不明には、メイより年上だが、主婦、女社長の二件の記事はある。

メイは既に警察に追われているようなことを書き残しているが、怯えだけで、事件が発覚していないのかも知れない。……頭に怪我をしたということは、揉みあいになったのだろうか？　メイ自身が命を狙われていたとしか考えられない。必死で逃れようとして、相手が倒れたのを、殺したと勘違いし、そのショックで記憶喪失になった……。メイならひ弱なところがあったから、そんなこともあり得るかもしれない……。

小田原の行方不明の主婦に狙いをつけてみたが、既に愛人と一緒のところを突き止められていた。女事業主の方は青木が原の密林の中で死体が発見され、最近別件で逮捕された男が再逮捕されていた。

一年よりももっと前の事件なのだろうか？

僕はその足で職場、名月観光に向かった。何時までも放置しておくわけにはいかない。久し振りで出勤すると、課長が変に砕けた口をきいて来る。

「きみ、出産に立ち会ったんだって？　きみの眼でほんとに誕生の瞬間を見たのかい？　凄いな、大変だったろう？　それにしても、随分痩せたもんだな。どうしたの？　まさか、この上、育児休暇が欲しいなんて言うんじゃないだろうねえ？」

「そのまさかなんですよ。課長。あと二週間。できたら四週間でいいんです。子供が生れると大変なんですよ。年次休暇もまだ残っていますし、なんとか、お願いします」

課長は冗談からコマが出て、驚いたのか立ち上がった。

「きみ！　育児はこれから、何年も何十年も続くんだよ。奥さんに任せろ。奥さん具合でもわるいのか？」
「はい……」
とても悪いさ、最悪さあ！
「営業マンが、みんなそんなじゃ、会社も倒産じゃ」
大げさな。会社の業績なんぞ、気になる心境じゃないんだよ。
「まだ独身になってるそうですよ、早く届けを出さないと色々の手当が出せないと庶務課で言ってました」
隣の席から、事務の女が小声で言った。
戸籍なんて何なんだよ。紙切れだろ！
「ああそうだ、瑞宝堂の女社長が秋の旅行のことで、きみに会いたがっていたぞ。それから、五月様も、出勤したら、役員室の方へ来るようにと。きみのことを変に気にかけておられるんだ。今日は水曜日、出勤しておられるだろう。忘れないで寄ってくれよ。ついでに、育児休暇のことも頼んだらい。実権は、五月様々なんだからな。きみも発展家だねえ！　まったく隅におけないんだから！」
会計に行って月給の前借りをする。
「そう！　で、赤ちゃんはどっち似？　奥さん凄い美人なんだって？」

「別にどっちだって……」
苛立つな！　まったく。どっちだってかまわないだろう！　金は欲しいが、いずれまとめてお払いいただくさ！
帰りに役員室に寄った。月に二三回顔を見せる大株主の相馬五月が、珍しく出社していた。
「おや、随分お休みだったらしいけど、どうしたの？　奥様はお元気？　随分痩せてしまって！　ここには誰もいないから、本当のことを話してごらんなさい！」
五月は手を広げ、僕を迎え入れるように言った。この人に言われると、本当に労わられている気になる。前にもこんなことがあったな、メイと出逢った頃のことだ。抱かれている五月の柔らかい胸のなかで、何故か、堪えていた涙が堰をきって溢れ出していく。
「妻が病院から、急にいなくなったんです。何がどうなったのか、子供と僕を残して、何処にいってしまったのか？　わからなくて、もう……」
「お子様が生れたばかりだというのに？」
五月はマリアさまのように手を胸の前で組み直した。号令することのない、しなやかな唇から、穏やかな和音が、傷跡を静かになでる。
「全然当てがないんですか？　それは困ったわね。堪えたでしょう！」
五月はそれが、自分のことであるように、苦渋の表情を浮かべる。

「安請け合いはできないけど、わたしに何か出来ることがあったら、相談にいらっしゃい。一人で悩むんじゃないよ。育児休暇がとりたいとか？　いいですよ、とって下さい。総務にはわたしから言っておくから……」

五月は必ず相談に行くことを、僕に約束させると、ほっとしたように静かに机に戻った。

一ヵ月の育児休暇を取り、給料を前借した。準備は整ったのかもしれない。で、僕はいったい何処へ行くんだ。何処にいけばいいんだ。それがわからない。

考えた末、それがたった一つの方向であるとでも言うように。気づくと僕は病院にいた。

暫らく見ぬまに、マリアは新生児室から乳児室に移り、醜いアヒルの子から白鳥に変身していた。

「驚かせてくれるよなあ、あんなに赤黒かった顔がすっかり白くなって。無理をして出て来て、変形していた頭も、すっかり丸くなったなあ！　鼻も心持高くなったんじゃ、何よりもこの眼。はじけそうに円らに、見開かれている。睫毛の長いこと！　ああ、笑った。僕がわかるんだ！　そうか、僕がパパだってわかるんだな！　そうか、わかるか！」

感激だなあ、親子だもんなあ、僕だって信じているさ。一度だって疑ったことなどないって、本当だよ。血の繋がりってたいしたものだな、全く。泣けるなあ。

誰もいないことをたしかめてから、僕は声をあげて泣きじゃくった。

メイを探す手掛りをなくし、今はもう、マリアに会うことが、メイそのものに出会えたようにわく

わくする。
「はい、はい、はい、はい、パパですよ、重くなったじゃないか、マリアはグラマーになりそうですよ！」
初めはこわごわ、いまは愛を込めて抱き締める。くくん、この匂い！
「これから、マリアちゃんは、沐浴ですよ。御覧になりませんか。退院したら、パパにやって貰うしかないんですから。よく見ておいて下さい！」
看護師たちは妻に逃げられた不運な男に同情するように言った。
「パパは手が大きいから、赤ちゃんを固定するのには、ママより向いているんですよ」
看護師達は楽しそうに不運な男の教育を始める。
「ほら、こんな風に、これで安定するから、赤ちゃんは泣いたりしません。要するに、頭と、手を安定させれば、パパも赤ちゃんも、怖いことないんですよ」
「そうです。そう、パパ素質ありますねえ。気持ちよさそうだこと！　ほら、あくびなんかして！」
看護師に習って、手にしゃぼんをつけ、足をくるくる下から上に移動させると、マリアはくすぐったそうに、足を突っ張らせて、きゃっきゃっと声をあげる。
「そうか、嬉しいかあ？」
マリアの蹴りで、シャボン玉が弾けて僕の視界が見えなくなる。

「あら、ほんと、わかるんですね、嬉しいんですよ」
のぞきに来た看護師長が感にたえないというように、僕を見上げた。
緊張し溜めていた息を吐き出すと、七色のシャボン玉が僕の息に乗って飛立っていく。僕にはマリアが残されているんだ。この子がいる限り、僕は生きていけるさ！
この柔らかい肌と弾力、確かな重量。この世のものとも思えない感覚の中で……。
僕は言ってしまう。
「病院から、今日、マリアを家に引き取ります！」
「淋しくなりますね。でも、もう、この赤ちゃんも、産婦人科にはいられなくなるから。小児科に移るよりは、その方がいいにきまっていますよ！　パパの手元で、しっかりと護っておあげなさい！　大切なのは育ての親ですよ！」
看護師長が僕の背中を、いたわるようにそっと叩いた。

マリアは誕生してから六ヵ月。お坐りもできる、もう、乳歯も泡を吹いて頭をのぞかせている。離

乳食も順調にすすんだ。叔母とベビーシッターの力を借りることで、それなりの保育環境は整ってきていた。それなのに出生届さえまだ出していない。母親が誰だかわからないでは、指一本出せない。それが口惜しい！　父親の存在など、マリアにとって何と無力なことか。予防接種や検診などどうしたらいいのか、皆目見当もつかない。探偵を頼むとしても、殺人犯のメイを追い詰めることになったらと思うと、これもまた、そら恐ろしい。いや、殺人などメイとは無縁だろう。そうだろうか、彼女がそう告白しているんだよ。僕の知らないところで戸籍上の夫と一緒に暮らしていて、ひっそりと時効を待っているのだろうか？　その夫は、叔母の言うように、出産、育児を他人に押しつけて、あのカッコウの托卵を気取っているのだとしたら……。違う、メイは必ず帰ってくるさ、少なくとも逢いに来る。母と子の愛の絆を信じたいもの。それに僕に対する愛だって。霞んできているのかもしれないけど、霞めば霞むほど想いが強くなることだってあるさ。あってもいい。メイは僕のスキーを、元国体選手の滑降を見てみたいと、ゲレンデを松明をもって滑降するセレモニーを、テレビで見たことがあったとかで、もう一度じかに見るのが夢だと言っていたんだ。雪のはかなさが好きだと、僕のいう雪の暖かさに包まれたいと夢見ていたんだから……。メイは僕に逢いに来る、そう想いたかった、でも、もう六ヵ月が無為に過ぎていった。

何とか、しなければ、僕が動かなければ、どんな打開策も見えては来ない。わかっているさ、わかってはいる。でもどうしたらいいんだよう？

眠れない、忘れられるものなら、メイをすっかり忘れ去りたい。今の僕こそ記憶喪失になりたかった。が、そのとき僕は何者になるというんだ！

街灯はついているが、空はしらじらと明けて来る。メイの手作りの産衣に、白い毛糸のおくるみで包まれ、眠っているマリアは、衣類や日用品を入れたバッグと一緒に車の中。既に四時間も走り続けている。自分自身何処へ行こうってのか？　警察の前を過ぎ、養護施設の裏を回り、乳児院の脇を走り過ぎた。

朝がきて僕が独り占めしていた車道に、車の数が増えてくる。僕の車は犯罪者のように追いまくられる。橋を渡りグラウンドの前を通り海岸に出て、ぼうっと霞む眼を擦ると、マリアが目覚めて、手をしゃぶりはじめる。

「あれれ、おなか空いたの？　ごめんごめん、今すぐミルクをあげるからね」

道路の端に車を止めて、バッグの中から哺乳瓶と魔法瓶を出してミルクを作る。手馴れたものさ。抱上げると喉を鳴らしゴックンゴックン飲む響きが、僕の胸に響いてくる。僕に乳房があって、直接授乳しているような気分に襲われ、マリアがいとおしくてたまらなくなる。

いったい僕の心に何が取りついていたんだろう？

海の果ての雲を染めて太陽が昇てくる。煤のような陰気な靄さえ払い除ければ、この状況がどうって事もないのかも知れない。マリアを高々と抱えあげて車から出た。朝の風が海の匂いを運んで、気

持が大きく膨らむようだ。マリアが声をあげる。高い高いが好きなんだから……。
後ろを通り過ぎたライトバンが急停車した。
僕とマリアは煌く海に未来を賭けるように、眼を細くして朝日の上がるのを見つめている。
「由川さん！　由川さん！　でしょう？　赤ちゃんはメイの赤ちゃんね！」
デニムのオーバーオールの女が走ってきて、大声を上げた。聞いたことのある声、メイが現われなかったかと、時々電話連絡してくる月田園芸の美香だ。
こっちが、しばらくとか、お早ようとか、声を上げる暇もなく突進してきて、僕が抱いているマリアを奪い取って抱え込むと後ろ向きになった。
その勢いがあまり凄いので、あっ、あっ、あ、なんて言っていると、美香はぱっと振向きざま、片手で僕の腕を掴んだ。きつく掴んだ手ががくがく震えて、ぐいぐい車道の方まで引っ張っていく。おっとっと、そっちのマリアをコンクリートの上に、落っことされては大変と、あわてて手を延べようとすると、体当たりで僕を跳ね除け、マリアに覆い被さるようにしてしゃがみ込んだ。
これはメイじゃない、美香の筈だが？
「いけないわ、いけない！　育てられないからって思いつめるなんて……。何も知らずにこんなに可愛いいのに……」
思いつめるだって？　美香がついさっき、日の出前の僕の心理状態を知っていたとでもいうのだろ

うか。
「……」
自分の行動を僕はどう説明出来る？
美香はすすり泣きを始める。
「……ほ、ほんとにかわいい、こんなに綺麗な赤ちゃん見たことないわ。……育てられないなら、私が育ててもいい！　賢だって生きてよ！　ここに悲しむひとだっているんだから……」
彼女のポニーテールの髪が海風に吹かれて踊っている。気付かなかったが、ここは、海にせり出した崖の上で、水面まで十数メートルはありそう。びっくりしたなあ、もう。
「もう！　びっくりしちゃった。赤ちゃんを抱いて今にも飛び込みそうなんだもん！」
僕は苦笑いで誤魔化し、それを否定も肯定もできない。
「忘れていたわ、メイの本当の、名前がわかったの。相馬優香ですって。電話があったのよ」
美香が言って首をすくめた。
顔が薔薇色に染まってまるで天使だなあ！　救世主ってところか！

「方法なら一つだけあるわ。美香さんと結婚したら、出生届を出せるし、マリアも懐いているようだし……万々才じゃないの？」
叔母が唐突にいった。
「そんな！　それは出来ないよ。僕はメイを待っているんだもの。雪山に連れていってあげると約束したんだから……。必ず戻ってくるよ！」
「そんなこと、当てになりますか？　そんなことが当てになるなら、こんなことにはなっていないのよ。目を覚ましなさいよ。美香さんは賢に気がありそうだもの。大丈夫だと思うよ。マリアには母親が必要なんだよ。賢だって、それで悩んでいたんでしょうが！　素直になりなさいよ」
叔母は美香の持って来てくれたバラの花を、テーブルの中央に山のように活けながらいった。
「叔母さんも、花に弱いんだから！」
「そんなことありませんよ。真面目に言っているのよ。チャンスを逃したら、もう、二度とやって来ない。本当のことよ、あなたにはハンデがあるんだから」
「で、マリアは何処に行ったんです？　僕は出先から早引けして来たんですけど、マリアの姿が見えないけど？」
「ああ、美香さんが、お友達と待ち合わせているとかって、マリアを連れて行きましたよ。マリアが

可愛いいから、見せびらかしたいのよ、きっと！」
「お友達って？　まさか、メイでは？」
僕は飛び出していた。メイか？　その夫か？　とうとう、行動に出たのだ。暫らく行ってから、もう一度戻って車にした。多分、向こうも車で来ているに違いないのだ。
道路に車を止めて、公園に急ぐ。運河を埋めて造った公園は、まだ植えて間もない木々が、添え木や、幹に巻いた藁が痛々しい。葉が余り茂っていないから、遠くまで見通せるが、ベビーバギーを押している姿は見当らない。見かけより人出は多く、小さな木蔭にも弁当を開いている家族が隠れていてびっくりする。
「赤ん坊を連れた若い女を見かけませんでしたか？」
聴いて歩いても満足な答えは返って来ない。
「さあ、いたとも、いないとも？」
焦ってくる。
まさか、マリアを攫って行方をくらましたのでは……。メイのこともある。女は全くわからない。美香がメイの夫の手先では？　そうかもしれない。不吉な思いに囚われ、走りだす。走り出していた。こんなところには現れないさ！　なら、何処に？　これ以上探しても意味ないことと、断定して反対側の出口から商店街に出た。と、月田園芸のワゴン車が走ってくる。運転しているのは美香だ。後部

座席にマリアが……。大丈夫か？　ベルトもなくて？
「おおい、ここだよ！」
大きく手を振るが、気づいた風もなく通り過ぎていく。マリアを連れたまま、これは誘拐か？　車に戻る時間はあるかな？　僕は急いで車に戻った。速度を上げる、マリアがいるのだから、速度は押えざるをえないさ。ワゴン車を視界に捕らえた。追いついている、速度を落とした。向かっているのは月田園芸の方向ではない、とすると、都心に向かって走っていくのだ。
メイの本名は相馬優香だと、美香は言っていた。メイとそんなに親しく話し込んでいるのなら、どんな　要求も受け入れてしまう下地は既に現実のものになっていたのだ。そう考えるのが自然だ。
つけているのがわからない程度に、ごく自然に……。
マリアがどうしているのか、心配になる。怯えているのではないか。速度をあげる、前にでるか？　嫌、それでは、メイか、その夫に出会うかもしれない機会を失うことになる。早まるんじゃない、押えろ！　でもまだ、六ヵ月なんだぞ。マリアの命が優先されるべきだよ。僕が決心した時、ワゴン車は停止している。僕は身震いした、これがメイの家なのか？
道路にそって長い石垣が坂になって続いていた。ベビーバギーが降ろされる、マリアは泣き声もあげない。美香が玄関に通じるゆるやかなカーブをゆっくりと登っていく。威圧するような相馬藤十郎の文字。

扉が開かれ、何人かが走って来る。メイだ！　メイが走り寄ってマリアを抱上げた。長身の男がそれを追ってくる。男がマリアを覗きこんでいる。男がメイから、抱き取って抱え上げた。マリアが笑い声をあげた。何故だ、どうして笑い声をあげる。美しい親子対面の図だ。美香とメイが抱き合っている。

男が何か言った。感謝されているのだろう。四人が輪になって回りはじめる、中心はマリアだ。喜びあっている。何を？　悪者の手から取り返したみたいに。悪者は僕なんだ、そんな、そっちが誘拐犯なんだぞ。そんなことがあってたまるか！　僕が悪人なのか？　幸福の絶頂で妻に逃げられ、たった一人でマリアを育ててきた僕が？　メイは、こんな家に住み、こんな男と暮らしていたのか？　僕を忘れて！

そうはさせない。僕は両手を広げて飛び出して行った。

「僕の、マリアを返せ！　返して貰おう！　そこにいるのは、由川マリア、僕の娘だ。これは誘拐じゃないか。汚ないなあ。何を考えているんだか、これは立派な犯罪だぞ！」

「何を言ってる。この子は妻の優香と僕相馬拓也の長女繭香に違いない。出生届はすませてある。何をほざいているんだ。六ヵ月間養育して貰った謝礼はするつもりだよ。そうだ小切手を切ろう。ここのところは、それと交換に、繭香を素直に引き渡して貰いたい！」

拓也と名乗った男は、使用人らしい男を手招きするといった。

「何だと、魂消たなあ、今の時代に金で子供が、人間が買えるとでも思っているのか？　そんなことを言って恥ずかしくはないのか？　それでも、人間かあ！」
「そちらこそ、何を言っているんだ。既に病院に依頼して親子のＤＮＡ鑑定もすんでいる。紛れもなく僕達二人の子供と鑑定された。わかったかな、わかったら、この子の為にも静かに引下ってもらいたいんだ！」
「僕に無断で何をしたと！　病院でそんなことを許すか！　僕はマリアが、メイのお腹のなかにいるときから、胎児語で話あってきたんだ。お産の時も立ち会ったのは、この僕だ！　今日まで育てて来たのも僕だよ。なんなら、マリアに選んでもらったらいい。マリア、パパはどっちかな？　さあ、本当のパパの方に手を出して御覧！」
　マリアは、身を起し、拓也の腕のなかから、僕の方へ乗り出してくる。小さな手を差し延べて、必死にしがみつこうとしている。
「さあ、黙って、こちらに引渡してもらおう。親は僕だとマリアは訴えているんだ。返せ！返すんだ！」
　拓也の腕のなかでマリアが泣き始める。メイが見かねてマリアを抱き取った。
「それは、今まで育ててきたんだから、当たり前のことだろう。ある種の動物には生れてはじめて見たものを、親だと思う習性があるのさ」
　拓也が侮蔑を込めて僕に向き直った。マリアはメイの腕のなかでも、泣きつづける。メイは優しく

マリアの涙を拭き、ゆっくりと抱き直した。マリアは不思議なものを見るように、小さな手でメイの顔に触れていく。眼や、鼻や、口と……。メイはされるままにしている。
「メイに暫らくなら、抱かせてやってもいい。でも、帰る気がないのなら、問題は別だ」
「優香は記憶を失っていたんだ、だから、記憶を失っていた間にとった行為に責任は持てない！」
拓也がメイを保護するように一歩前に出て肩を開いた。
「いずれにしても、僕に無断で、六ヵ月の乳児を、誘拐するなど、許される筈がないんだ。逢って見たかっただけなら、これですんだろう。僕はマリアを連れて帰るよ」
その時、メイがマリアを美香に押し付けて、男の前に出た。僕はメイに向かって立った。
「メイ、きみは、この家にその男といて、本当に幸せなのか？　僕はそれが聞きたい！」
時が止まった。息詰まる瞬間、メイが叫んだ。何を叫んだのか、僕には理解できなかった。その体の中から引き絞るような叫びが、僕をパニック状態にしたのだ。その時メイが僕に向かって倒れこんだ。
きづいた時、僕はメイを肩に担ぎあげ走りだしていた。振り向くと、美香がマリアを抱いているのが見えた。
「美香、マリアを叔母のところに……」
逃げよう、逃げるんだ。その他には何も考えられなかった。何人かが、後を追ってくる。追ってく

る男達を、拓也が押える声が聞こえた。
「深追いするな！」
僕は走った、メイを担いで走っていた。血が流れていた。車まで長い時間が過ぎたような気がした。どうしてそんな気になったのか、わからなかった。血は僕のもののように僕の足から流れ落ちた・メイを軽々と肩に担いで、僕は雲の上を走っていた。

なんかわからん、あの時、僕は自分でも予想できない行為に出た。そしてこうして雲の上を歩いている。暖かかったメイが僕の肩の上で冷えていくのがわかっていた。
僕達の目的地は冬山までひろがってしまう。三人で僕の故郷で生活するプランを、メイは暖めていたんだ。子供が生れたら、三人で貴方の故郷に帰りましょうね。
冬は雪に包まれ、シーンと静まり返った世界の中で、夢を語り、音楽を楽しみ、子供を育てる。晴れた日には街までスキーで降りていって、買い物をする。
見せてあげるよ、天空から落ちてくる雪の大群を、白の輝かしさと、その魔法を……。

マリアはここにいないのに、忘れものがあると、僕のオーバーを引っ張る。美香は叔母にマリアを届けてくれただろうか？　不思議なほど泣かない子なんだ、その扱い易さ。子供を連れての遠出は危険すぎる。ひとまず叔母の家に預けて欲しい。

「こんなこと頼めるのは叔母さんだけさ」有無を言わせず押し付けて……。美香ならやってくれるさ。

北に向かって車を飛ばし続け、山脈に突っ込むと白いものがちらちらし始め、やがて本降りになり、懐かしい景色が見え、幹線道路から、車を雪煙と共に脇道に入り込ませた。

生きていては意のままにならなかった彼女は、今、僕にすべてをゆだねて、後ろのシートで眠っていた。今度こそ永遠にメイは僕のところに戻ったのだ。誰の手にも絶対に渡しはしないさ。メイが生き返るときのために、顔を半分出しておいた。幸い降りが激しくなって、近くを通る者もいない。

山を背に休業中のゲレンデに雪が積り、前面に僅かな田畑を置いて谷に落ちる。故郷の廃家のある部落が一望できる。ここが一番景色のいい場所だが、いまは、ただ、ふっくらとした雪をまとって沈黙している。

頭上で不吉な鳥の声が響き渡り、僕は寒気で震えあがる。液体窒素に突っ込まれたように硬直して動けなくなる。

「メイ！メイ！」自分のものとも思えない声が冬空にひゅうひゅうと舞い上がる。

漸く気を取り戻しその体を裏返すと、背にナイフが突き刺さっていた。まさかナイフが刺されたま

まだったとは？　信じられなかった。白いセーターの背に血はにじんでもいない。透きとおっているような白い顔に枯葉が一枚張り付いている。抱き上げるが温くみがあるのかないのか判定できない。

「蘇ってくれよ、メイ！」

重ねた唇は果肉のように冷たい……。

あの時、僕の問いに、メイは何かを叫んだのだ。それが殆ど信じられない。だが、それをバネに、僕は行動を起したんだ。メイを後ろから刺させたのは彼か？　刺したのは彼か？　後にいたのは拓也と美香だったが？

僕はやっとメイを捕まえたのだ……漸くこの腕に取り戻した時、もうメイの命は……。

一時間でも二時間でもいい。メイと一緒にいたい。嫌、永遠に一緒だ！

拓也はもっけの幸いと、僕を犯人として警察にたれこんだに違いないさ。彼が何故、僕を追わなかったのか？　それは利用価値を見つけたからだ。

此処は警察から離れている山の中だから、多少時間がかかるにしても、メイは間もなく連れ去られるだろう。その前に、相馬拓也も人を連れて乗り込んで来るかもしれない。

彼らにはメイが必要なのだ。彼女の死を証明するために！

もうメイは僕から逃げたりはしないし、どんな悪態もつかない。もう僕以外の誰にもメイを触れさせない！

悪態って？　僕はそこで意識を飛ばしてしまう。眼窩のなかで舌打ちをし、眼球の丸みを飲み込んでいる。
僕の力で犯人を探す時のために、柄をラップで包んで、ナイフをそっと抜く。犯人が僕でない証拠になるさ！　その他に僕の無実は証明できない。
メイを橇に移し、スキーで休業中のゲレンデを滑った。新雪が深い、この谷間に僕達の城を作るんだよ。
設計士のように、雪の上にスコップで間取りを描いて行き、山際にメイのベッドにする雪室を繰り抜くと、車に戻った。
彼女を抱上げる。苦しかったろうね、恐ろしかったろう！　毛布に包まれていても、メイは冷凍人間ほど冷たい。
「もう一度口を利いておくれ！」
彼女の表情が眩い、微笑が浮び上がる。ここに来たことをメイは喜んでいるのだ。
吹雪が一荒れするとフロントガラスに付着した雪で車の中は薄暗くなるが、ワイパーが雪を払うと、急に夕日をかいま見せる。
顔を近づけると、彼女は薄っすらと目を開ける、その奥がきらりと光る。
「眠っていたのかい。早く起きろよ」

彼女の髪の房は暖かく皮膚を縁取っているというのに、触れ合う唇は硬直している。それでも温めたら蘇りそうな気がして、僕はメイを一夜抱きかかえていた。僕の体温が彼女を徐々に溶かしていく。抱き締める僕の感覚が極に達すると、冷たさと温みの差を不明にする。二人一緒に氷塊になる寸前、輝かしい日の出を見た。何処も眩しい虹色で影がない。

足許から雲が湧き上がり、金色や紫色に棚引いていた。僕は雲の上にいるのだ。

別れの時がきている。僕は決心してメイを雪のベッドに運んだ。

ふと見るとメイは左手の人指し指を伸ばして硬直している。この指は何を指していたのだろう。僕に犯人を探して欲しかったのか？　それとも僕を犯人だと指差しているのか？

彼女は今、僕の内部、僕の父祖からの大地に身を寄せ、清らかな雪にふっくらと包み込まれる。もうすぐ雪のベッドは白い花とあげは蝶で一杯になるさ！　ほら、なった。メイの目が薄っすらと開き、口尻が上がって、笑窪がへこむ。あげは蝶が飛び交い、眉のうえに止まった。僕の母が亡くなった日も、雪のなか、あげは蝶が舞い込んだものだ。

わかったよ、その指さす方向ははっきりと記憶して置くからな！

誰にも勘付かれないように、一時も早くここから遠ざからなければ……。僕はメイに別れを告げると思い切って雪室の口を塞いだ。天気は瞬く間に変わる。雪が降りスキーの跡も、車の跡も、靴跡も埋もれてしまうだろう。

目印になる木の枝を折った。折口が緑色の裂け目になる。目印から右三米。スコップを横たえて足で雪を被せた。

雪の中は不思議に暖かなものなんだよ。メイ、此処で僕の帰りを待っておいで。

僕は吹きさらしの中に立って、眼下の白の中から、両親の墓の膨らみを見分けた。角膜を冷たい涙が潤していく。その時、スキーをはいている足が狂った。

雪の中では目の具合で思わぬ光と影を見ることがある。目を凝らすと水玉模様には足があって、少しずつ位置をかえ、こちらに向かって迫って来る。

こんなことをしたら、僕が犯人にされてしまう。それでも構わなかった。その前にメイが崖から落ちたんだよ。足は雪庇の方へ雪庇の方へと進むのだ。空中を無数の金色の粉が舞うのが見える。足元を雪が動く。突然の轟音、白が怪物になって立ち上がる。ザーザー、ザーザー、ザー。

皮膚の下の脂肪層を透かして、メイの声が聞こえていた。

「貴方は何時生れて来る気なの？　自分の力で……」

生れなければならないと言う責苦。胎内にいるかのような血流のザーザーと流れる音を聴いている。なんとなく感じとれる光の方向に向かって鼻を突き出すと、空気が僕を吸い寄せる。

何処へいくのだろう。この世？　あの世？　宇宙？　その外？

医学の進歩を待つしかないでしょう。

植物人間ですって？　誰が？

僕は今夢から醒めた。気付いたんだよ。必死で口を開こうとするが、見ようとするが、見えず、動こうとするが動けない。

何があったんか全くわからん。此処は病院らしいな、痛むところはない。体の一部に不自然なツッパリはあるが、耳は聞こえ、考えているようだ。目があるのか？　光と感じた明るさは、幻なのか捉えどころがない。

でも、メイといるんだ。それだけはわかっている。

気付いてよ。体は動かなくても、微かに、わたしの声が聴こえない？　わたしたち同じ母の子宮に住んでいたんだもの、聴こえなくても心を読みあえたっていいんじゃない！

姉の泣き声など、小さい時から聴いた覚えもないよ。姉さん、姉さんこそ、テレパシーで僕の言葉を聴いてくれよ！

何重かの夢の中から一つ一つ醒めていけば、必ず現実に辿り着くだろうさ。

確かなのは点滴か、生命維持装置か？　定期的にやってくるらしい靴音。遠く湧く様々な音の雲。時は時々甦り、刻々過ぎ、又停滞する。

突然僕は、目前で、ぴかりと、光を捉えた。

僕は全裸のまま細長い板に自動的にベルトで止められてリフトで持上げられ、細長いステンレスの浴槽のなかに降ろされる。僕の上にひたひたと湯がいったり来たりするが、肩と腹は一度も暖められることもなく凍ったままだ。顔にかかったしぶきを拭いたくても、手は固定されている。

頼りない恥ずかしめに泣いて、僕はキッチンで洗われている魚の思いで、ヒレをばたばたさせる。

進歩というものはこういうものなんだな。人間にとって何とも頼りない屈辱的なもの。

ざあっと大雨をつくって、持上げられ回転していく豪勢な音が、一人前の男が入浴のために出す音だとは？　僕はKの名前で記号化され、自動的に運ばれ、凍傷で黒々とした硬直を持って、僕の意思と確実に反対の方向に、跳ね返っている。

それは、操り人形使いの誤謬にもにている。丸い湯気はふわふわと立ちのぼり、天井にぶつかっては沈む。僕は板に括り付けられたまま、息もつけずに、むせかえるが、体を引き摺り出す自由はない。

救いを呼ぶ、僕は果して誰であったのか？　見積もり決定を下しているのは何であったか。

兎に角、僕にとって瞬間の何一つも、なおざりに出来ないのだ。僕は好奇心を持って総てを見、熱風で乾かされる。濡れなかった部分はすでに乾きすぎ、象皮のような皮膚、ベルトが少しゆるんで、

僕は従順に板の上で横むきに括くりなおされる。
銀色の板には無数の穴が穿たれている。湯気は熱狂して活気づき、入り乱れ、又上昇運動を始めている。皮膚から浸透した熱が、今、けだるさになって気が遠くなる。
向こう側でも干物のような人間が持上げられている。僕に浴びせられている熱風が、凍傷を和らげ目の前に、男湯と染め抜かれた架空の暖簾をはためかせる。
僕は蘇生したのか？　はいているズボンは古くなって、てらてらしているのに、足元の地面はいまだに僕からは遠い。ズボンは落ちもしないで未練がましく足にまといついている。
マリアを沐浴させた頃が懐かしいな。マリアはどうしているの？　どうしたら逢うことができるんだよ？　靴のかかとをそっと地上におろすと、むきだしの蒲団を積んだトラックが、きわどいバランスを保っていく。またも、積み過ぎのトラックがいく。もしかして、僕の荷物ではないのか？
僕の許可も得ずに引越しの荷物が、僕の前を行くが、荷物は運命を変えられた苦悩を見せて、古びていく。僕はそれを子供のように、股間から逆さにみている。
僕のはらわたのように、雑然と積み込まれた荷物が、生きながら遠く離れていく。タイヤのあとが、ゴムの弾力性で、僕の実印や歴史であるかのようにつづき、僕の影にも同じ連続模様をプリントして、道を彩っていく。
「賢なの？　危ない！　あなたは、殺人誘拐の罪で指名手配されているのよ！」

電話すると叔母の声がくぐもっている。
「そうなんだ、メイの殺しか？　容疑は？」
「賢がメイを殺す筈なんかないのに、でも、弾みってこともあるからって、心配しちゃった」
「僕の面前でメイは刺されたんだ。気が付いたらメイを担いで逃げていた」
「この家も見張られているみたい。携帯だから、大丈夫でしょうけど、注意して！」
「聞いてほしいよ。メイを刺した本人が、僕に罪をきせようとしているんだから。でマリアは、元気なの？　電話口にだして！」
「それがね、マリアを渡さなければ誘拐罪で警察に突き出すと脅されたの。賢、黙って聞いてよ！びっくりしないで！　そのメイのお祖父さんってのが、相馬商事とかいう有名な会社の創業者で、亡くなった後、奥さんが会長だとかなんとか、お金持ちそうなこと言っていたわよ。向こうが子供を寄越すんなら、あんたは男としてメンツが立たないかもしれないけど、養育費を少しは出して貰えるんじゃないかな、なんて考えて、わたしは渡さないといっては見たものの、あんたに何時までも母親やらせておくわけにも行かず……」
冷気が僕の体を通り過ぎた。
「誰、誰に？　渡しちまったんだよ！」
「相馬拓也の使いの者でしょうよ。貴方もいい加減に諦めなさい！」

「諦める？　そんなこと出来るもんか。使いの者は大友と名乗ったの？　それとも相馬？」
「メイは、相馬優香っていうんですってよ。相馬家から依頼されて来たんでしょう。貴方の子供じゃないって言わんばかりなの。あなたの将来を考えれば、せっかく向こうがそう言ってるんなら、それに乗ってみるのもいいんじゃないかと……。あんたには分らないだろうけど子供には母親が絶対に必要なのよ。貴方じゃマリアが可哀想よ！」
「叔母さん騙されたんでしょう。どんな顔した人だった？　メイは死んでいるんだよ！　何処に母親がいるんだよ！」
「美香さんが電話に出たいって言うから、かわるわね」
「何だ、美香がいたのか、なら、わかりやすいや。きみだって見ていたじゃないか。誰が刺した？　きみはメイの後ろにいたんだ。後ろから刺したのは誰だ？　何か隠しているのか？　拓也に言いくるめられたか？　もしかしたら、身の危険を感じているのか？」
「ええっ？　うそ！」
　そんな声を上げてももう遅い！
「メイの家族関係を知ってるだけ話してくれ。急いで、時間がない」
「相馬優香がメイさん、拓也が夫、祖母が相馬荘子、創業者相馬藤十郎夫人。母が弥生、叔母が五月。メイさんの父が大友雄三、メイさんには……」

電話がきれている。こっちの電池がなくなったらしい。
マリアを奪ったのが、相馬拓也だとすると、弥生とメイを失っても、相馬荘子の遺産の半分を代襲相続でマリアに継がせることが出来るというわけか！　遺産相続人としてマリアを認めさせようと籍を入れたのかもしれない。狡すっからい奴、相続させた後、金だけ取って何れ殺すか。奪い去ったのが、相馬五月だとすれば……。荘子の遺産全部を自分のものにする為に殺す。しかし、五月に限ってそれはないな、困ったときには相談に来るようにと五月はいったんだ。
その時がきていた。僕は拓也によって警察に手配されてはいるが、メイは背中から刺されていたのだ。その事実がある限り怖くはない。
これはマリアの命の問題なのだから。

地下に燃料タンクが埋めてあるため、火気厳禁の文字が地面一杯に書いてある場所で、美香が独りで束ねた紙を焼いている。今丁度風が吹いて燃えている紙が黒あげはの群舞になってどこまでも立ちのぼり、もう落ちる重さはない。

この場所を選んで何回か焚き火をすれば、少なくとも最期の一回で危険の警告を思い知らされるだろう。北極には熱だけ発して蜜のない花が咲くが、昆虫は熱に浮かれて寄って行くんだ。美香もその種類なら、どんな昆虫が寄っているの？　黒あげは蝶は逃げていくようだね。僕はあげは蝶が何処にいくのか知っているよ。

美香は煙にむせて喉がつまりうつむくが、すぐに顔をはねあげて僕をみる。

「誰に向かってノロシをあげているのかと、お聞きなの？　それは、賢、由川賢に向かってあげているのよ！　わかってくれたら、いいんだけど……。わたしは負け犬が好きなの。同情じゃない、わたしも同類だから。でもね、何時までも負け犬ではいられない！」

賢て、僕じゃないか。と、いうことは、そうだったのか、知らなかったな。

「わたし、朝食をすませたら、急に、職場に行く意欲を失ってしまったの。月田園芸。花を扱うからといって、人間関係が美しいとは限らないものよ。その対比で醜く見えるもの。出勤するために早く起きていながら、行こうか？　行くまいか？　と迷ってのろのろ身支度をしていたの。行こうか、行くまいか、止めた！　思い切ると爽やかに手足が伸びて自由になって、急に忙しくなってしまったのよ。わたしのチラチラする舌が見えるじゃない。電話をして、ずる休み。してやった！　となっちゃった！」

美香の緑色の腕輪がかち合う音。灰が飛ぶと、背景として空があるとわかる。

「わたしはいま、引き金に手をかけているのよ。だから誰にも遅れをとらない。炎が好きなのよ、殺されても殺してから死ぬ位の用意は出来ているの。だって、優香がわたしの妹だったのよ。そう思うと鼻歌がでてくるわ！」

美香は唄を口ずさみはじめる。

「危険じゃないかと。あなたがやっと言うことが出来たとしたら、このことだけは言わせてもらうわ。わたしは人にやらされるのではなく、わたしが自分でするのなら、何時だって大それたことができそうだってこと！　背後からだって、どんな卑劣な手段だって平気よ！　勝つためなら……」

美香は気のいい笑顔になりながら、低い脅すような声でいう。美香には、僕がわからないのだ。変装しているにしても、思いだせないのか？　それで、僕に恋しているのか？

「金持ちや権威者のおならで吹き飛ばされるくらいなら、ここで火を燃して吹き飛ばされた方が増しだわ。あなたは言うことあるの？　どういうことかしら、話すことを倹約ばかりしていると、誤解ばかり製造されるはめになってしまうのよ。わたしの賢もそうだから駄目！」

駄目といわれたって！　美香は話すために焚き火に対する配慮をなくし、煙の濃さにむせかえってしまう。美香は飛び退いて、あ、あ、あ、上を指さしている。白い建物の屋上から、身を乗り出して、真下のこのあたりに狙いをつけているものがいる。

僕がいま一目散に逃げおおせたとしても、血の雲を踏むのをまぬがれないだろう。僕の歩く後には

何時までも何時までも僕の実印のように赤い印が続くんだ。
美香はホースを引き摺ってきて、焚き火に向かって放水を始める。ゴミはグラグラし、積重なったまま、僕の方に水と一緒に近づいてくる。美香は、放水するのにリズムを持たせるから、ゴミと灰の島が転覆もしないで、スーイスイと僕の足を襲うのだ。
美香の恋文は焼けながら、甘い臭気をふりまいている。賢様、賢様、その宛名書きが燃え残っている。
焚き火の目的が恋のノロシなのか？　夢の爆死だったのかもしれない。
「あら、賢が落ちると思えたのに、あたしは痛いような想いで上を見たり、下を見たりしていたのに。賢でしょう、あなたはもう下に落ちているのね」
「美香、そう物事は劇的にはいかないものさ！　僕は前から、確実に地に落ちていたのだから」
僕は、変な歩き方で、僕の荷物の送りこまれた、この白い建物の周りをひとまわりする。美香が叔母と話し合って僕の荷物を送り込み、僕の住居を確保したつもりなのかもしれないな。
見上げると、屋上の白い金網に黒いものがぶざまな四つ足をかけて登りついている。あれは僕ではないのか？　目のせいかもしれず、何処にでもある図なのかもしれない。

職場にも自宅にも戻れず、真犯人を探すためには先ず、仕事を選ぶことから始めなければならない僕は、頼りなく、無力に入り組んだ悪意のなかを、肉又は骨として泳いでいく。

「新聞広告を御覧になったのですか」

秘書だという中年の女は不思議なものを見るように、僕をみる。

「そうです。引っ越してきた新しい住人に抜け目なく投函された新聞の、求人広告を丁寧に端から読んでいきましたら、お宅が抜群に月収が安かったんですよ。僕は推理を働かせて見ました。安いということは、つまり、その、色々僕にとって好ましいことがあるのに違いないと、結論したんです。僕の希望にぴったりでした。つまり、そんなわけでして……」

電話の受話器が秘書の手から、僕の手にバトンタッチされる。

「月収二万円の広告に応募して来る人は、変わり者か、怠け者か、気違いか、お人好しか、おっちょこちょいか、策士か、よほどの物好きか。月収二万円がお気に召すというのは、確かに変わっていますよ！」

「では、そういう広告を出された会社の方は、どう言うことになりますのでしょう？」

僕は反論をこころみる。この家の玄関の表札にはＳ９９９とあるだけで社名もなかった。

「私は、それを狙って広告を出したわけではございませんのよ。確かに二万円というのは、何としても不当です。留守番の半身不随の老人でも、それよりずっと高いのが相場ではありませんか？　仕事をしなくてもすむ仕事ではないかと思ったのですか？　とんでもありませんよ。それでもとおっしゃるのなら、お逢いしましょう」

「僕の自尊心は足の裏にあり、他人と逆のやりかたで、仕事を選択しようと決心したんです」

「あなたはわたしが、相馬壮子と知って、応募されましたか？」

「いいえ、だって、広告のどこにも、固有名詞はなかったと思いますが？」

GOサインがでたらしく、秘書の中年の女が、太々とした腕を滑らせて、階段を駆け上がっていく。僕は運命に導かれていく。この広告が相馬家に開かれていたとは？

奥の一間に派手な色のネグリジェの老女がいて、それが相馬商事の会長であり、広告主であるらしい。僕はこの部屋に入るのにブレーキを掛けずにはいられない気持ちで立ちすくむ。しかし、無一文であってみれば、運命のメカニズムを掴む挑戦をしなければならないのだ。

ふるふると、三重とも、四重とも見究めのつかない、薄羽のようなネグリジェが会長を包んで花のようにふるえている。

「そう、あなたが……。まあ、いいでしょう、あなたを採用しましょう。依存はありませんね？　でしたら、サインをなさい！」

僕はサインをするついでに、ネグリジェのフリルを掴もうとする。会長がそれを振り払った。
「あなたも、フリルに火がつけたくなりますか？　それで私は死んだのですよ」
会長が僕に手渡した給料袋には中央に透明な窓があるが、その窓のなかには何も見えなかった。丁度顔の映らない鏡を見ているようで、困惑と安堵感があるような、妙な気持ちだ。なにしろまだ何も働いていないのだから、僕にもカラでも仕方ないという、常識的な気持はあるさ。
「期待を裏切っていますか？　入っていますよ」
会長は僕を真直ぐに見た。
「はい、あります！」
僕は会長を安心させるように優しく言った。暖房が効いていて暑いせいか、夢らしくもない給料袋が夢で、現実は、会長の背を見ていたんだ。ネグリジェの背が透けていて、そのなかに、何も見えない！　僕が驚愕して舞い上がった時、背の透明の部分は、火事場の窓のように明るくなった。
横になっている会長は、包帯で腐敗を隠し窓に向かっていて、僕からは顔は見えない。
「わたしの背はあるかしら、わたしにも姿を見せたことのないわたしの背が、正体をあなたに見せているかしら？　自分を一望のもとに点検できないなんて、始末の悪いものですよ。これでもこの背、宝の持ち腐れと言われたこともありましたのよ。なにかの利用価値があったのかもしれませんわ。火傷のあとが、バラの花束とか、秘境の地図とか、そんな風に見えないかしら？　わたしはずーと背で

予感してきましたのよ。背の予感をそのうちコンピューターにかけて、どう利用したらよいか、答えを出して貰いたいと思っています。今日も背中の超能力に期待しているのですよ。でも、背中なんて本当は始末の悪いもの。私の背中と私が、血のつながりを切り離すことなど、出来やしないじゃありませんか。焼け爛れても、やっぱり私なんですもの。痛み止めを打ってあっても、仰向けになると痛くて駄目なんです。いいですか、あなたのお仕事は、私を殺した真犯人を探し出させないこと、探そうとする人物がいたら、絶対妨害すること！」

会長は、ふうっと長い長い息を吐き出した。会長は燃え残りの横顔を見せて、顔をほころばせてはいるが、脚はタオルケットから出ていて、後方に突っ張らせて、容易ならない形相と、容態を感じさせる。

「信念で、あなたはあなたの進路を選択したのでしょう？　あなたは私に一番近い方に違いありません。身内でいらっしゃるのよ。でなかったら、いまどき、二万円なんぞで雇用される方はありませんもの。仕事をしなくともいいのではないかと計算して、事実仕事をしていないのだと、あなたは思っていらっしゃる。仕事をしていない、それが何よりの証拠。あなたは身内以上の身内でいらっしたのですよ。私はあなた以外にそんなに身近なものを、一人も知りませんもの。重荷ならありましたけど、手ばなして喜んでいるんです。鬼ですわ。弥生も、私も、そして優香まで、わかっていますのよ。私が今、言っていることは、あなたに対する遺言だと思って下さい。私を殺した真犯人を探そうとする

人物がいたら、絶対妨害すること。それで私の遺産の総ては、あなたのものに違いありません。一円たりとも国庫に納めるなどというヘマだけは避けることですよ」
「でも、それは、余りにも……飛躍しすぎでは……それに、真犯人が誰なのか教えて戴かなければなりません。でないと……」
希望にそうことは出来ないと、言いかけて僕はやめた。これが偶然とは信じられない。
僕が誰か知った上で、言っているのだろうか？　僕は硬直したまま返答を待っている。この人が知るひとぞ知る相馬籐十郎夫人、相馬壮子なら、そばに五月のいないのが不思議だった。たった一人の生き残りの孝行娘だ？
「あなたは私を信じない顔をしていらっしゃるわ。私は大戦中、爆弾が笑窪をつくって落ちてくるのを見たことがありますよ。どんな時でも殺人者の善意だけは信じるものです！」
弁護士だという老人と、白衣の医師が処置台と電子カルテを引っぱって入って来て、殺人者を見るように僕をみる。僕は度外れな緊張でコチコチになり、簡単に病室から押し出されてしまう。
ネグリジェに火をつけて一生を終わるというような、慌てものの老女に何を言われたとしても、額面通りに受け取れるものではないさ。しかし、一生の終わりに念入りな嘘をつくとも思えないが？
秘書が慌てて先に立った。例の玄関を出るとき、テレビでよく見る大友雄三が入ってくるのを見た。これが、メイの父親か？　この家の住人としか見えない自然さで、壮子とは反対の廊下に消えて行っ

た。

人気のない舗道を歩くと、もう二度とあの会長を見ることはないだろうという、感慨が立ちのぼってくる。それにしても、誰がネグリジェに火をつけたというのか？　しかもその犯人を護れというのは？　彼女の言ったことは、逆説的に、犯人を告発して欲しいと言っているのではないのか？　しかし、老人なのだ、認知症でないとは言えないのだから。

さあ、どうしたらいいのか？　僕は雲の上を歩いていた。

これから、確認に行こうと思うの。弥生って人のことです。あなたには、もしもの時のために、お知らせしておこうと思って……」

美香の声が高い、よほど緊張しているんだ。

「メイから聞いてるって？　暴走するな！　どうしても行くって言うなら、僕も行くよ！」

僕は引き止めにかかる。

「弥生は、わたしの母だと……、優香と美香は姉妹だと、優香から知らされたとき、わたしがどんな

に驚いたか。あなたに分かるかしら……」
「姉妹だって？　ということは？　父親違いってことか？」
「弥生は大友雄三と結婚する前、わたしの父と周囲の反対を押し切って駆け落ちしたのよ。それを、父親の籐十郎氏に強引に引き裂かれた。大友雄三と結婚する時に、わたしは里子に出されたと……」
「そこが、月田園芸ってわけか？」
「ううん、その家は破産して離散してしまい、ずーと消息がわからなくなっていたのが、あの頃、弥生さんの殺された頃ってことよ。行方がわかって引きとるという弥生さんと、家族が対立していたんだっていうのよ。優香の記憶喪失も、もとはといえば、みんなわたしが原因だったみたいなの。聞いても、ぴんと来ないけど、優香は相馬家に帰ったあと、わたしに逢いに来て話してくれたのよ。賢に知らせようと何度も、手紙を書いたんだけど……出さずに燃してしまったわ」
「あのとき、のろしをあげていたのは、その手紙だったのか？」
あんなに、分厚いラブレターをあんなにたくさん書いていたのかと、僕はとまどっていたんだが。内心嬉しくはあったな。
「そうよ、賢に知らせるべきか、どうかで、わたしは迷ってしまって……」
「……」
「それが、もしものことがと思った時、やはり知らせておくべきだって……。それでお電話をしたん

です」

「だとすれば、今度襲われるのはきみじゃないか！　一人で行くのはよせ！　場所は何処？　秩父か、目印は何かないか？　そこで待っているんだ！　いいね、僕もすぐに出発するから……」

電話は切れていた。それにしても余りな現実の変貌に、病み上がりの僕はついていけそうにない。

道路は玉突き事故があったとかで、渋滞していて動けなくなった。突発事故にはカーナビも役にたたない。約束の時間までに、とても到着できそうにない。どうしたら、いいんだ！　美香が相馬家の孫娘となれば、必ず標的になるんだから……。

美香は殺されても殺してから死ぬくらいの覚悟は出来ていると、うそぶいていたな。自分でするのなら、どんなおおそれたことも出来そうだとも。それが、ほらふきでないことを僕の前で実行して見せようとしているんだ、多分。相手は大友雄三がからんでいるとしたら、美香に勝ち目はないな！

道路は渋滞のまま、いらだつ人々を乗せて不穏な空気をはらんできている。僕は車を捨てて走りだしていた。駅前で自転車を借りた。

漸く渋滞の帯を振り切って自由に走れる道路にでた。約束の時間からは、既に二時間は過ぎている。空には雲一つなく、回りは林ばかりだ。鼻欠け地蔵のあたりに、人影はない。木々の上を渡る風がさやさやと音をたてる。

何か残していったのでは？　あった！　地蔵のお供物の下に、手帳を千切った紙が捻じ込んであっ

た。両側の雑木林は段々と深くなる。僕は紙を手にして進んで行く。
（一本杉から、右に三十歩、奥に十二歩、木犀の匂い、崖が近い）一本杉が目に入った。林に踏み込んでいく、林の奥には暗くて深い森が続いていた。
夕暮れ近い陽射しが林のなかを切りさいている。右に三十歩、これはメイの歩幅だ。二十五歩で歩みを止める。林は静かに呼吸している。奥に八歩、何かが動いた。
美香か？　呼びかけようとして堪えた。他の人に聞かれたらことだ。美香の両手に白いものが支えられている。僕の歯がかちかち音をたてた。
振りかえって美香が手を上げた。白い丸いものは頭蓋骨だ！
「掘り当てたわ。凄いでしょう！　あら、賢は、びびってるの？　不思議ね、わたしには、このしゃれこうべが愛うしいのよ、涙が出て止まらないの！」
「て、ことは、弥生さんなんだな！」
僕は長い吐息を吐いた、胸が痛い。
「そう考えるしかないわ」
美香は五十センチは黒い地面を掘り下げて、泥だらけだ。
「代るから、ちょっと休すんだらいい」
僕は手を出して美香を地上に引き上げる。周囲には作業用かシャベルや、水でもいれた大きなタン

クがある、大げさなことだな！　美香に代って、丁寧に土を取り除き、骨が見えるようにしていく。ほぼ、人型が現れた。僕は地上に這い上がった。

「これでいい、全部堀り出さない方がいいよ。ここで、警察に知らせるんだ。でないと、返ってきみが疑われてしまうよ。で、メイは誰に殺されたと言っていたんだ？　自分が殺したなんて嘘なんだろう？」

「母親の突然の死で、混乱していて。自分がいれたコーヒーを飲んでの、目の前の死だったから。五月さんに、お姉さんを殺したと攻め立てられ、何かの手違いで、自分が殺したと思ってしまった。兎に角このままにしておいたら、大変なことになると、五月さんが大友雄三を呼んで、埋めようということになった。彼らが埋めている間、優香は、何が何だかわからなかったけど、その位置を覚えておこうとしていた、その時、後ろから頭を一撃されて意識を失ってしまった。そういうことよ。気がついたとき、車の後部座席に横たわっていたんだって。ずっと外を見ていて、頃合を計り、トイレに行きたいと騒ぎたてて、車が速度を落としたところで、転がり出たのだと……」

「そこで、美香に発見された。でも、その時には記憶が失われていたってわけか……」

「わたしを引き取りに、弥生さんに付き添って来ることになっていたとかで、記憶は失われていても、その方の回路がしっかりと繋がっていたのかもねって、お母さまに導かれたのだとも。あのころ、優香さんはわたしの名前が大好きだって言っていたのよ。今にして思えば、わたしの名前は知っていた

わけだし、優香と美香、似てもいたから……」
「弥生さんと大友雄三の離婚の原因はわかっているのか？」
「優香は父親の大友雄三を嫌悪していたわ。離婚の原因は五月さんとの関係にあったから籐十郎氏が激怒して社長の座から追い落とし、会社から永久追放になったらしいの」
「そんなところかなあ、名月観光が、その方向にあったのだから……。会長の壮子を五月はフリルに火をつけるというやりかたで殺したのかも……。会長が、らしいことを言ったんだよ。そうだとしたら、あの人は、あんなに優しそうな姿で、日常のように殺しができるのかもしれない。本当かなあ、とても信じられないけど。そうだとしたら、怖いなあ！　弥生さんもメイの見ていないところで、毒薬を注いだだけ。その五月と、離婚で相馬家から排除された恨みに燃える大友雄三が、相馬家の乗っ取りを狙って組んだとなると……」
「それで、総て、するすると解けていくわ！」
「大友雄三は自分の娘を打ち据えても、さすがに殺すことは出来なかった。でも、美香とは、秘密を握られた上、血縁はないんだから、これからの標的は美香だよ。注意するんだ、ここから、携帯で警察に知らせなさい。１１０番だ。掛けたら、逃げるんだ！　最終的にはＤＮＡ鑑定で弥生だとわかるさ。今はそれだけでいい」
「あなたは、追われているのよ。早く逃げて！　わたしは車であとからいくから。一寸待ってる……」

「電話は、逃げながらだって掛けられるだろう。早く行こう！」
美香は何を待っているんだ？
「相馬弥生らしいと電話するんだ！　僕はマリアを取り返さなければならないから、急がなければならないんだ！」
美香は何故僕と一緒に来ないのだろう？　誰かと待ち合わせているのか？　道路は危険だから林の中をいく。
林を切り裂いていた陽の光は傾き、おだやかな光の輪を幾重にもダブらせ、僕の足が落ち葉を踏みしだく度に、輪の中央でしゃれこうべの弥生が踊る。弥生のもののように、僕の栗色の髪が、口に入って、払っても払っても、粘りついてくる。弥生が僕の足を引っ張るから、進めない。
その時、前方で、シャッターの音がしたような気がした。誰だ！　拓也か？　雄三か？　五月か？　それとも？　僕の視線が一瞬ピントを狂わせる、誰かいるのだ。
「誰だ？」
やはり誰かいるのだ。となると、美香が危ない！　僕は急いで引き返した。
この臭気はなんだ？　ガソリンか、灯油の臭いか？　魚の焼け焦げるような臭いが絡み合う。木々はオレンジ色の舌を広げ、パチパチと音をたてる。危険を感じた鳥の群れが一斉に飛び立っていった。
「美香！　美香！」声は行き場を失って僕の中で空回りする。硬直したように足は歩みを止めた。

表面が焼け焦げた黒い大きな塊が見え、隣に白骨死体が並んでいる。目の前が真っ暗になる、むごすぎる！　こうまでする必要がどこにあるんだ？　そうまでして何が欲しい？

背中に突き刺さっているナイフが見える。背後から狙われたのだ、そのあとで、ガソリンをかけて火をつけた。僕と美香を監視していたのだろうか？　こんなに短時間に？

そして僕をおびき寄せて犯人に仕立てる。　逃げよう、逃げなければ……。僕はめくらめっぽうに走った。

炎は次々風下に向かって燃え移っていく。乾ききった雑木が炎を呼び寄せる。

こんなことなら、美香の手を引いてでも一緒に逃げるべきだったのに……。美香を護りきれなかった悔しさがくる。何時も非力に過ぎるんだよ。僕は誰一人護ることができない。美香も女だ、口ほどの抵抗は出来なかったのだろう。

僕が木陰で身を隠そうとすると、思いがけないほど近くから、黒豹のような男が飛び掛ってきた。強靭な長い腕で僕の襟首を掴み、振り回しにかかる。

「やはり、由川賢、貴様だったか。こんなところだろうとは思っていたさ！」

小ばかにしたその口調、はっとして見ると、両眼が寄っている相馬拓也の顔があった。

「拓也か、お、おまえが犯人だなんて、先の先からお見通しさ！　相馬家の財産をまるまる頂戴しようってわけだ、婿養子だからな！」

「ふざけるんじゃない。優香の夫だが、弥生とは無縁だ。養子でなんかあるもんか、姓を相馬と選択しただけだよ。養子の約束を渋っているのは相馬家なんだ。貴様、優香を何処に隠した！　おまけに美香まで、あんなむごいやり方で殺すなんて、とても、人間のすることではないな！」

拓也の青白い顔の中で赤く充血した目が凶々しい。

「どうして、僕が殺すんだよ！　僕は弥生さんと面識もない。美香を僕が殺すどんな理由もないじゃないか！　さっきまで僕は、美香が弥生さんを掘り出すのに、付き合っていたんだ。警察に電話して早く引き上げるようにと忠告したのに……。彼女は誰かを待っているようだったから、僕は先を急いだんだ」

「僕は鼻欠け地蔵まではわかったが、そのあとの方向がまるでわからない。困っているところに、殺人をして逃げ帰る貴様に出会ったってわけだ。貴様は何を考えたのか僕の前で引き返した。僕は貴様をつけて来たんだ。犯人は現場に舞い戻るとは、よく言ったものさ！」

こんな時になって、美香の通報で来たのだろう、パトカーが三台走ってくる。

「危ない！　体を伏せろ！　お前がつかまっても自業自得だが、僕にはまだ、することが残っているんだから！」

「僕は殺してなんかいない！　電話は優香の叔母の五月から来たんだ。由川賢がこれから、鼻かけ地蔵に行くといっている。何か面倒が起こるのではないかと心配だ、自分も行きたいが、母の具合が悪

くて行けない。行って、優香の行方を聞き出して欲しいと、そういったんだよ。それで、おまえを待ち伏せていた。僕は.美香が来ているなんてしらなかったよ！　あれが、美香だなんて貴様がいうまで、わからなかったさ」

「お前は僕を、警察に殺人誘拐罪で通報したんだって！　よくそんなことが出来たもんだな？　お前はメイの後ろから彼女を刺した！」

「どうして、貴様はあの真っ黒な塊が美香だとわかったんだ。語るに落ちるとはこのことだよ。優香に捨てられた、貴様のような単細胞は、美香にも相手にしてもらえなかった、動機はそれで充分だ。優香をどこに連れて行ったんだ！　言わないなら、警察に突き出すぞ！　そこにきているんだから……」

拓也は僕を侮辱して平気だ、僕の怒りは全身を貫き、行き場を失っていた。彼は僕の後ろ手を締め上げているからな。暫く食事らしい食事もとっていなかったからか、思うように反撃できない。

二人は体を低くして煙をさける、大変なことになったな。山火事の責任などとれる筈もない。

「お前がやっていないというのなら、五月さんが大友雄三と仕組んだことになる。こんなところにいたら、それこそ、犯人にされてしまう！　五月さんに限ってそれはないと思っているが、美香が優香から聞いたところでは、そうとしか考えられない。まして、美香まで殺されたとなれば、疑う余地はないのかもしれない。お前も彼らの手先でないのなら、身を護ることだな！」

拓也の車で夕暮れの林道を走る。憎しみも復讐も静止していい。
消防自動車が何台も何台も僕達の車に逆行して行く。人手不足で放置されてきた雑木林が天空までオレンジ色に染めて次々に燃え広がっていく。これは美香の弔いの火だ。

「あの時！」
と拓也は言った。
「あの時、いや、ずっと気になっていたんだ。きみは優香に問いを発した。たしか、この家でこの男と暮らして本当に幸せなのか？　僕はそれが知りたい！　と。僕は震え上がった、もしも、優香に愛してはいない、この家にいるつもりはないと、そう言われたらどうしようと恐怖したんだ。優香は意を決したように、庇っている僕の前に出た。気がついたとき、優香を後ろから刺していた。どうしてナイフなど持っていたのか、どうして刺したのか、今でもわからない……」
拓也はいきなり、僕の禁断の隠れ家に手を突っ込んだ。僕の棚上げしていた化け物が生き返る。
「そんな！　それは違う。優香は叫んだんだ。あなたを見ると死にたくなる！　あなたを見ると死に

たくなるのよ！　と、体の底から絞りだすような声で、絶叫したんだ。あの時僕の頭は真白になった、何をしたのかわからなかった。気が付いたら、僕は倒れこんだ彼女を担いで走りだしていた。どこかで、拒否されたと思ったのだと思う。産室に見ず知らずの男を入れたことを、彼女は恥じていたんだ。後悔していたんだよ、僕はそう思った。それをただ一つの愛の証しだと思ってきた僕にとって、それがどんなに衝撃だったか？　お前にはわからないさ。彼女を僕のものにする為には。もう、あれしか方法はなかったんだ。メイは今、僕の白い家で眠りについている。僕はあの瞬間の自分の意識を、今でも、取り戻せないんだ。僕の脳が考えることを停止したとも、冷静にこずるく立ち回ったとも言い切れない！」

喉から血が流れていた、お化けは自分を叩く。何故だ！

「そう、僕は刺しても手が震えて、ナイフを引き抜くことが出来なかった。後ろにいたから、誰にもわからなかったのに……。混乱していたし、体勢をすぐに立て直して、知らん顔を決め込もうとした。きみが優香を担いで走り出したとき、僕は混乱はしていたが、これで救われたと思ったんだ。君は僕の救いの神だ！　追おうとするもの達を抑え、頃合をみて警察に電話したんだ。だから、今でもどこかで、きみは監視されているだろう、君は逃げ延びられない。それは僕の知らないところで、優香と暮らしていた罰だよ！」

何故今という時に、彼は告白するんだ、告白した後で僕を抹消するつもりか？　それとも……。

「あなたを見ると死にたくなる。優香はそう言ったのか？　そう言ったのか？　僕はそうはとらなかった、死にたい程、君を愛していたと、告白したのかと思ったんだ。いや、勿論、彼女は僕を愛してくれているとは思ってきたさ。でも本心はわからなかった、だって、七、八ヵ月も他の男と生活して来たんだよ。いくら記憶喪失だったとしても……。まして、自分自身のこととなれば、優香はそれで悩んでいたんだ。そう、本当にそう言ったのなら、嘘を言ったのでもないし、君を責めていたのでもない、自分自身が許せなかったんだと思う。彼女はお産の時のことを思うと震えを抑えることが出来なかったんだ。夫がありながら、夫を愛しているのに……。拒絶反応というものだろう……」

拓也は生き返ったように、僕のパニックを増大させる。よせ！　それは禁句だ！

今、レストランで、衆目にさらされているのでなければ、僕は何をしたか、何をしていたか、自分に自信が持てない。

「サツには、指一本ふれさせないさ。メイは静かに眠っているんだ。もう、誰にも渡さないから！　お前は、弥生さんや美香をやっていないとしても、彼らとグルなんじゃないのか？」

拓也は僕から手を離し、はじめて僕の顔をみたように目を釘づけにした後、靴先で床を叩きながら言った。

「まさかきみ、子供まで道連れにするんじゃないだろうね？　それだけは止めとけ！」

「僕の子供だぞ、何を考えてる。お前が攫って行ったのか。返してもらおう！」

「僕は知らない！」
拓也は急に逞しさを失い、ひょうひょうとした後姿を見せて、逆光のなか消えていってしまう。
彼は娘婿であっても、養子でないとしたら、誰かがそれを阻止していたのかもしれない。彼なら、妻が遺産を引き継いでから殺すだろう。衝動的な殺人でなければ……。
混乱した頭の中を整理しようとする。美香を殺すことで最も有利な立場に立つのは誰か？
相馬五月！　また、そこに取り付いてしまう。
『そう、堪えたでしょう！　どうしたらいいのか、考えてみましょう！　わたしに何か出来ることがあったら……。必ず相談に来るのよ、来ると誓って！』
五月の優しい言葉の余韻が、たった一人の味方であることを証明するように、僕の胸に戻ってくる。
そうだ、五月に相談してみよう！　何故もっと早く思いつかなかったのか？
これもまた、七不思議だな！　その結果が怖いのでは？　結果がわかっているのに、何となく断末間を誤魔化してしまう、あの夢のやりかたで、僕はそれを引き伸ばしてきたのか？

歩道に黒い傘が続き、車道には乗用車が渋滞している。
「何が、あったんですか？」
車から首を出して隣の車を覗きこむと、その車も喪服の男を乗せている。
雨のなか、花輪の行列は高さの制限や日照権やらで彫られてとんがった鉛筆型の塔まで続き、更に石垣を一巡りしている。他人の家にも死者が何人かずついるぞといわんばかりに、死者はひとりで何軒かを巻き添えにして活気づいている。
先方の車から喪服の男女が降り立った。男は大友雄三と一緒に、テレビでよく見かける顔だ。女はちらと見た横顔は色白で中高……、瑞宝堂のマダムに似ている。彼らは一つの傘で行く。見ろよ、この組み合わせの胡散臭さ。
僕の勤務地、相馬荘子の家、相馬家は黒白の天幕に巻き取られていた。僕は車を降り、前をいく喪服の女性に聞いて見る。
「相馬商事の創業者夫人、会長の相馬荘子が亡くなったんですよ。全身大火傷だったというのに、あと二ヵ月、あと一ヵ月、あと一週間、何て言われていたそうですの、よく持ったものねえ。あたし達とは医療の質が大分違っていたのでは？」
相馬壮子は亡くなったのだ。やはりな、もう二度と会えないような気がしていたんだ。メイの祖母が亡くなった、弥生の母。そして僕の雇用主？

「相馬荘子のお子さんは？」
「ああ、息子さんはなくて、娘さんが二人。姉の弥生さんは周囲の反対を押し切って結婚したが、父籐十郎氏に無理に引き離され、大友雄三と結婚させられた。けど、結局は破局。今は外国に滞在中とか？　荘子さんが亡くなったとなれば、外国からだって急いで舞い戻るんじゃないの。妹の五月さんも結婚に反対され、四十過ぎて未だ独身なのよ、噂もないではないですよ！　会社の方は腹心の部下で、孫の優香さんの夫、相馬拓也さんがお若いのに社長になっていらっしゃる……、もしかすると会社も変な男に荒らされてるんじゃありませんか？　どうも、見渡すと、そんな人たちが行くようですね。大友雄三に乗っ取られる、と。専らのうわさですよ」
喪服にかかる小雨を気にしながら、女は意味ありげに片側の口尻を上げた。
「いずれにしても、あたしとはなんの関係もないことなんだけど……」
女は憂慮を、勘違いされるのを恐れてでもいるように、焼香する人々の群れのなかに、足早に消えていった。
老婆の死がこんなに華やいだものだとは？　殺されたと本人は言っていたのに？
僕は昨日のルートで側面の玄関、Ｓ９９９から秘書を呼びだし、相馬家に入った。
「会長が、僕に言い残されたことはありませんでしたか？　月給のことなどですが……」
僕はおずおずときりだす。

「ああ、お聞きしました。社長の最期の願望を、わたしは確かにお聞きしましたよ。由川賢の名前を呼び散らしてくれと言うことでした。あなたが社長に告げた名前を、ご自分が忘れるに違いないから、忘れ去らない内に、百万回も、あなたの名を叫んで、わたしの、つまり、会長の周りを埋めて欲しい。死んでから後、呼び名が違っていたら、困るわとおっしゃいました」

「困られたでしょう！　もう、少しおかしくなっていらっしゃったんですね」

「さあ、それがわからないんです。それで、わたしは口が酸っぱくなるほど繰返しましたよ。会長はもう、要態が悪くなっていらっしゃって……。わたし、逆上した大友雄三に、つまみ出されるまで、叫び続けました。そういうことです。五月さんは会長に部屋に入るのを阻止されていたのに、要態が悪くなると、忽ち孝行娘に様変わり、親子なんて変なものですね！」

女秘書は二万円の入った月給袋を差し出しながら肩をすくめてみせた。社長の最期の願望をどう捕らえたらいいのか？

「どういうことを意味しているのか、あなたにはわかりますか？」

僕は困惑していた。勿論、遺産が入るなどと夢見たわけではない。月給を事務的にサインして受け取る。

「あなたが認知症ではないかと、問われたのなら、それは、何とも？　九十二歳ですから……。しかし、何もかも、理屈にあっていましたよ。素晴らしい天の采配です！　これで、お子様の名誉は護ら

れ、会社も永遠です」
「はあ……」
「わたしもそれに乗って、渾身の力をこめて、最期の勤めを果たしたつもりです。あなたは会長との出会いを偶然だと思っていらっしゃる。しかし、偶然なんてそうあるものではありませんよ。あの新聞は私が届けたものです。あの広告には注意を引くように、かすかに色がついていたんです」
「と言う事は、そういうことですか？　僕もおかしいとは思っていたんですが？　で、どうして？」
「さあ！」
僕が眼を大きく見張ってから閉じると、秘書の顔はくるくる回って止まらなくなる。
「誰が異常なのかなんて、何時だって簡単に判断できないのでは？　会長と優香さんは、帰宅されてから、随分話あわれていましたよ。五月さんを入れずに……」
秘書の女はつぶやくと、周囲を気にしているように、僕をおいて、そそくさと会長の部屋に引き上げていった。
この奇妙な勤めは終ったのだ。深追いはできない。
僕はお通夜の終る頃を見計らって、瑞宝堂の女主人に的を縛った。
「相馬会長とはどういうご関係で？」取材みたいな口調で声をかける。
「なぜ？　私？　お嬢様の弥生様の幼い頃からのお友だちなんですよ」

「では、大友雄三氏と五月様とは、どんなご関係で……」
僕は食いついて見る。
「ええっ？　如何したんでしょう。大友雄三さんは見えていませんでしたよ。お出掛けだと五月さんはおっしゃっていましたけど？」
女主人は何処かの手が伸びたかのような驚きを見せたが、すぐに体勢を立て直した。
「貴方は確かうちのお店に、名月観光の営業でいらした方ですよね」
「思い出して下さいましたか、由川賢です」
「ああそうでしたわね。まだ奥様からご連絡ございませんの？　お若いのにすっかりお寡れになって、気付かないところでしたよ。そうそう、五月様も心配していらっしゃったわ。あの方、本当にあなた方お二人が、うまくいくようにと、それは、願っていらっしたんですよ」
女主人は質問を巧みにかわした。五月としては、その方が好都合だったのでは？　あのまま、メイの記憶が戻らないことを願っていたのかもしれない？　相馬五月は味方なのか敵なのか？　善人なのか悪魔なのか？
会って追及するつもりが、電話しても機会はやって来ない。母親の死であってみれば、今日のところは、僕は帰らなきゃあならないな。
メイの叔母は相馬五月だ、美香から、メイの名前が、相馬優香だと聞かされたときも、僕はそれに

気づこうとしなかった。ずっと一人で母親の老後を看てきた五月にとって、母の死はどんな意味を持つものだったか？　最後に身辺から排除されていた事実を、どう捉えていたのか？　聞き正したかった。僕の名前が秘書の口から叫ばれるのをどんな思いで聞いたか？

臨終の床で、壮子が僕の名前を秘書に叫ばせたのには、どんな意味があったのか？　臨終の場にいたのは、五月と大友雄三と、弁護士と医師と看護師と、秘書。そこまではわかっている。拓也はいたのだろうか？

五月に恩を感じている僕としては、メイと結婚に踏み切るときも、逃げられた後も、相談に乗ってくれた唯一の人だったのだから……。

たとえ、五月が犯人だとしても、この上、メイと弥生の死を知らせる気にはとてもなれない。

五月がだれかに、利用されているのでなければ、ありえない話さ！　やはり、あの大友雄三にしてやられているのでは？　キャスターをしている経済番組の巧妙なトーク、口先三寸で五月など、軽く手玉にとられてしまうに違いない。そうだろうか？

翌日。

相馬五月に面会を求めるがインターホンに返答はない、メイはいないのだし、拓也も落ちこんでいるのだろう。使用人も昨日の疲れでお休みなのかもしれない。門前のテレビが僕を嘗めまわしている。門を開けてもらえなかった場合、何処から侵入するか、さよならした、秘書のルートとはいかないの

だ。恐らく屋敷の周りは防犯装置が張り巡らされている。思案していると、門が開き、男が頭を出した。
「五月さまは、すぐお出かけだから此処で待っていて下さい」
この錆びた声には聞き覚えがある。
「僕、由川。先日五月さんにお会いしたいとお電話したとき、電話口に出られたのはあなただった。図星でしょう！」
「ああ、あの時の……」
頭髪の短い実直そうな男は記憶していたのか、笑顔を見せる。
「こちらに優香さんの子供が来ていると聞きましたが……」
「いや、彼女はお弔いにも現われなかった。どうしたのかと、五月様と話していたところですよ。お子さんがどうかされたんですか？」
男は気がかりそうに言った。何かを隠している不自然さは感じられない。この男が何かはしらないが、五月は使用人に知られずにことを運ぶのだろうな……。
「壮子さんが亡くなる直前ですか？　五月さんは外出されたことはないです。つきっきりでしたから、頭が下がりますよ。出来ないことです。まるで、仏様か、マリア様でした。ずーと寝ずに看病ですよ。勿論看護師も医師もおりましたけど。あなたからお電話があったあと、美香さんからもお電話があり

ましたが、会長が亡くなられたのでお疲れを取るために仮眠をとられましたよ。とてもお休みには、なれなかったと思いますけど、横になっているだけでもと、おすすめしたんです」

これだ、五月は美香の電話を受けるとこっそり家を出た。渋滞に巻き込まれただろうから僕より遅くなったに違いない。取り込んでいたから行動は目立たなかったのかも知れない。大友雄三と一緒だったろう。

「随分わがままな病人でしたが、嫌な顔一つしないでよくつくされましたよ。それなのにお母さまは内心弥生さんの方がお気に入りだったので、最期の頃はもう、五月様のことを弥生と呼んでいましたが、いやなお顔一つせずに懸命でしたね。そういえば、大友雄三も顔をださなかったな。こっちは色々あったから、顔を出せる筈もないが……」

マリアの行方を突き止めるためにはこんなところで、ぐずぐずしていられないと、家の中に突進しようと身構えたとき相馬五月が近づいて来る。

この優しそうな容貌の中に殺人鬼が潜んでいるのか？　それとも全くの誤解か？

次の瞬間、吸い寄せられるように、僕は五月に抱きすくめられていた。宙に浮いて、浮き立つ光の粒が視野をふさぐ。何故この人の前に出ると、涙が出てくるのかわからない。

「あなたは盲人なのよ。過去は忘れなさい」

あの独特の優しい口調で五月はささやく。

「そんな、なんで僕が盲人なんです、誰が過去を忘れる、勝手なことを言わないで下さい！」
僕は軽いジャブをはなつ。
「駄目です、僕、もう、その手は食いませんよ。仮面は剥いで下さい！」
五月に握られている右手が蒼白になる、長い間の全身の渇き。彼女の唇が僕の唇を求めて、懸命に伸び上がる。ふらふらの関係！
「泣いているの？」
五月は目を開けて、首を傾げる。総てが湿って柔らかくなる。僕は息をとめた。
「さあ、優香のところに行きましょう！」
僕は全身の力を寄せ集めてブレーキをかける。五月のペースに乗っては駄目だ！　林のなかで美香が炎をあげながら、こぶしを振り上げていた。
「そんな、すました顔をして、僕の娘を何処に隠したんです！」
僕は背骨を建て直し、怒りに胸を震わせて抗議する。
「貴方こそ、優香を如何なさったの？　母が亡くなったのに、たった一人の孫娘がまだ姿を現わさないなんて考えられないことですよ。さあ、あの娘のいる場所に案内していただきましょう！」
この女は、メイの死体を欲しがっている。僕を犯人にして、すべてを決着させる為に、やっぱり、この優しさは甘い罠、企み。色仕掛けで、僕を探っている。

「マリアを帰してくれなければ、メイのいる場所は教えられない！」
五月は暫く僕に背を向けて立っていたが、門から走り出てくる男をしりぞけると、ガレージから、門前に回ってきた高級車に、コートとバッグを投げ込み運転手を降ろした。
「賢さん、さあ、そのボロ車は捨てて、優香のいるところまで、この車で案内なさい。あなたのお車、スノータイヤ、ということは……」
五月は僕を運転席に導く。
「お話は車の中でお聞きしましょう」
柔和さを剥いだ五月の青白い顔が、僕に有無を言わせない。
「早く案内なさい！」
変幻自在、威圧的な命令口調。この人だけは命令はしない人だと信じられたのに、僕の鉄板のような胸から、小刻みな吐息が軽機関銃みたいに飛び出していく。同情しているとみせて、僕の利用度を検討していたに違いない。冷酷なその頭は僕の隣りに誇り高く持上げられている。
犯人に仕立て上げる為に僕をメイのところへ案内させようってのか？　警察には連絡済みか！
「マリアを何処に隠した。誘拐で捕まるのはそっちの方さ！」
「貴方は、尾行があったら優香の所へ案内してくれない。ということは、繭香を取り戻さなければ、貴方は私を殺したりできない！」

絶対の自信をもって、歯切れがいい。
「そうさ、よくわかっているじゃないか、マリアをこの手に取り戻さない限り、メイのところには、いけない。生れて間もない子供を如何しようってんだ。マリアのいのちの保証がない以上は、あんたの命の保証もないさ。僕はハンドルを握っているんだ！」
五月は僕を無視し携帯電話で連絡をとっていたが、僕の耳元に携帯電話を突きつける。マリアらしい泣き声が耳元でわっと大きくなった。
「マリア？　なぜ泣かせているんだ！　誰だ、きみは！」
間違いなくマリアの声なのか、どうか、父親の癖に泣き声から何のしるしも掴めない。
「ああ、よしよし、眠いの、いい子いい子……」
女の陰でマリアの泣き声が小さくなって間延びし、まるで母親に甘えてでもいるように、途切れ途切れ。いや、口と鼻を押えているんじゃないだろうな？
「そこは何処なんだ。きみは誰？」
「元気ですよ。眠りました、あ、ほんと眠りましたわ。じゃあ、ご心配なさらずに……」
女は声をひそませ、電話を切ってしまう。したたかな女のようにも優しい女のようにも思えた。
まさか？　叔母さんでは？　それとも、姉さんか？
「これは何処の誰なんだ！」

五月に噛み付く。
「あの女の声……まあ女ってことにしておきましょう……殺すように命令された女の声に聴こえました？　優香に会わせてくれれば、赤ちゃんはすぐにもお返し致しますよ。あなたの子供なんかに用はない！」
これが本音だ。とりあえず、マリアの生存を信じることにする。電話の数字は後半の二桁は見損なったが、覚えている。電話帳でないと言うことは、親密な人物に預かってもらっているのでもなさそうだ？
周囲に目を配るが、尾行してくる車は見当らない。幾つかの県警管内を通過するのだ、吹っ飛ばすだけだ。マリアを盗んだ以上、五月が犯人であることは分りきっている。
「やっぱり、あなたの故郷でしたのね」
タイヤにチェーンを巻くのをみつめながら、五月は肩を竦める。
川を一本越えるだけで、道路の両側、雪の層が徐々に高くなっていき、車の音に一群の鳥が舞い上がった。
「凄い雪！」
「雪の豊かさは金の亡者には判るまいさ！」
「どういう意味？　一体何を考えているの？　あなた、一度でも優香の気持ちを考えて上げたことが

ありますか？　記憶を喪失していたとは言え、夫がありながら他の男と生活を共にしていたことに傷ついていたのですよ。そりゃ、貴方だって傷ついたに違いないけれど……。私としては、貴方が直接、彼女の思いを聞くことで、彼女への想いを断ち切ってくれるのではないかと、期待したのよ。お気の毒ですけれど、優香は拓也を愛していたのよ。あの現場にわたしもいたんです。あんなことになるなんて、さすがのわたしにも想像もできないことでした……」

「何を言いたい？　そうでるのなら、こっちにも覚悟があります。美香があんなにむごい姿で殺されるなんて……、想像を絶する姿でしたよ。あなたのところにも美香は電話したんでしょう。大友雄三にも連絡したはずだ。それともあなたから拓也と雄三に知らせたんですか？」

「わたしは拓也には連絡しましたよ。メイの居場所を探ってもらいたくて。わたしは母の臨終に立ち会っていたんですよ。のこのこそんなところに出かけたりしますか！」

五月はメイが僕に向かって倒れかかった時、あの場に本当にいたのだろうか？　拓也と美香の背後には、事務員らしい男が走り寄ってきてはいたが……。あの時、拓也にナイフを渡せたのかもしれない。小切手を渡すと見せて……。メイが標的だったのか？　僕が標的だったのか？　頭が混乱してくる。

自分から身を引くように、僕は五月の隣で体を細めていく。弱点を握られ、さしで戦う資格を失っているような、忘れようとしてきた潜在意識が目覚めている。

「美香は他に頼る人がいないんで、僕に電話してきたんだ。彼女はわかっていた、弥生さんを殺した犯人が誰か。メイから聞いていたんだから……。美香は犯人に電話で知らせた。そのために、命を落とした。ひどすぎるよ！」

「私は、優香にも美香にも、何もしていないわ。あなたとは違う！　それに、殺すものに、道徳的な殺しを要求するのは滑稽すぎるわ！」

五月はそこで屈託のない笑い声をあげた。

僕は雪を左右に振り分けながら、わざと迂回して進んでいく。

これだけは許さない。メイが刺されたナイフで相馬五月を殺す。その前にメイの前で本当のことを吐かせるんだ。醜悪なものを曝け出させるには白の中がいい。

雪の壁が高さを増し、有名なゲレンデをとりどりのヤッケで舞い降りるのが見える。道路巾が狭まってくる。山が迫り、車を進めるのに苦労する。

束の間の昼が急ぎ足で過ぎる。折り返す道はない。

踏みしめておいた僕達の城は、そのあとで降った雪に覆われて、見分けがつかない。五月は雪の輝きを避けて、腕を瞼に押し付けている。

「こんなところに、あの娘を隠しているんですか？」

「……貴女が弥生さんを殺し、会長まで殺したことは知っているんだ。僕は会長からそのことは聞い

た。メイもマリアもいずれ殺すつもりだった。その上美香まで、あんなむごいやり口で……。そうまでして相馬家の遺産を独り占めしたいか？」

「フフフ、笑っちゃうわよね。お母様のネグリジェ、あなた、あのフリルを見たでしょう？　フルフル、三段も五段も、炎を近づけて見たくなるのは、わたしだけではない筈よ。それが私の罪かしら？　お母様は弥生第一で、私のことなど眼中になかったのよ。何をやっても、駆け落ちしてさえ、あきらめずに、弥生を相馬家に呼び戻して、こともあろうに、わたしの恋人だった大友雄三と結婚させた。大友が私に恋しているからといって、不倫だとか、なんとか騒ぎ立てて、会社から屈辱的な条件で追放したのよ。弥生のやることなら何でも許せて、私のすることは総て否定された。そんなことに耐えられる筈がないでしょう。父母は私の力をおそれていたのよ。死ぬまで恐れていたわ。私は男を自由に出来る能力を持っている。それは力よ。でも会社の名誉の為には、それを隠さなければならなかった。いいきみだわ、自分の子供を軽蔑した当然の報いよ！　身動きも出来なくなってからあがいても駄目！　何で臨終の場で、あなたの名前が連呼されるの？　あの秘書は、会長の命令だからといってわめきたてた。雄三がつまみ出すまでやめなかったわ。何の目的？　あなたに聞いているのよ？」

「さあね、僕にもわからない。会長の背中に聞くんだな。会長は背中の超能力に期待していた。あの秘書はこれこそ、天の采配だと納得していた！」

五月は弾かれたように僕から跳びのいた。

「美香まで殺すことなかったんじゃないのか。しかもその罪をあとからいく、僕または拓也に転嫁しようだなんて。その上子供まで奪った。その自慢の能力で、まんまと騙したあんたを僕は決して許さん！」

相馬五月は思うように動けない。雪の中その姿は穢れそのもの、黒々としている。

「どうして私が、二人を殺すの？　美香も優香も、わたしは殺したりしていない！」

何があっても動じない声。

「じゃあ、貴方はあの娘を殺してどこに？　私にとっても愕きだったわ。まさか、表裏から刺されるとは……。しかも、一度は愛した男達の手で……」

五月は腰まで雪の中に入り込んだ。

「メイはこの雪室の中だ。彼女は子供と僕と三人で田舎で暮らすのが夢だった。見ろ！　これが僕らの城さ、メイはこの中で眠っているんだ！」

目印の木から右に五米、足で探ると、スコップの柄が僅かに踵に引っ掛かる。

「かわいそうに、こんな冷たい雪の中で……」

五月が絶句した。殺人鬼が、何を言っているんだか？

「冷たくない、雪の中は人の心よりずっと暖かいものなんだぜ！」

スコップを引き抜き、位置を見定め、雪室を丁寧に崩していく。壁が崩れ落ちると、あげは蝶が舞

い上がる。白いベッドの上、白いセーターに、血が滲み拡がって　メイの胸に咲いた大輪の赤い花だ！
「メイ！　犯人を連れて来たよ。これがお前のお母さんを殺した犯人だよ！　これがお前のお祖母さんを殺した魔女だよ！」
苦悶しているメイを抱き締め、心臓の鼓動を聞きたくて耳を押し当てる、僕は自分の鼓動をメイの鼓動と聴く。時間が跳ぶ、そうなんだよ、生き返ってよ。僕はデリケートな傷にふれずに、巧妙に着地する。
メイを覗き込んでいた五月は、僕に背をむけ、さくさくと雪を踏む靴音を響かせる。雪が融けてきているのか？　雪に刻む音は一人ではなく、何人かになる。
「どうした！　さすが、怖くなって逃げる気か！」
メイの脇に置いたナイフを、持ち直して振り返ると、五月は後退し、樹氷の陰から、黒ずくめの男達が、五月を護るように取り囲んだ。あっ、望遠カメラ！　拓也か？　大友雄三か？
リフトで上がったのか、遥か上で黒いものが動いている。
「悪く思うなよ。優香をやったのは自分だとお前が自白したんだ！」
拓也が、シャッターを切りながら近付いてくる。
メイを拓也のカメラに納めさせてなるものか！　とっさにスコップを持ち上げ、拓也に向かって投げつけた。拓也は飛び退き、僕は雪の中にカメラを叩き落とすことさえ出来ない。

「誰にも渡しはしないぞ！　この美しいメイは僕一人のものだ！　そっちに体力があっても雪の中では元国体選手のこっちのものさ！」
メイを抱き上げると、凍った体が腕の中で、みしみし音を立てた。
そうだ！　この先の断崖の方に拓也をおびき寄せるんだ、カメラを構えてどこまでも追ってくるだろう。
メイを抱上げたまま雪の中を漕いで、睫毛まで粉雪をつけて進んだ。拓也は操り人形のようなオーバーな動作でぎくしゃく追って来る。
「由川賢、お前はもう包囲されているんだ。僕はシャッターチャンスを貰っただけさ」
ゲレンデの下から黒いロボットのような人間が、横並びにスクラムを組んで上がってくるのが見える。警官だな！　五月はゲレンデの下にところを換え、警察の幹部らしい人達と頭を突き合わせている。
僕はゲレンデの上に向かってペンライトを振り回した。頂上からオレンジ色の炎が尾を引いて、舞い降りてくる。光を受けて無数の金色の粉が舞い上がる。松明を持った男たちが美しい放物線を左右に描きながら滑り降りてくる。
「メイ見てご覧！　これが君の夢見ていた雪祭りだよ！　みんな、僕の友人達だ！　メイのために滑ってくれているんだよ！」

どこかでトランペットが吹かれていた。誰か効果を狙ったな……。上出来じゃないか！
その時、ゲレンデの谷間に、美香の顔が浮きあがった。
美香が手を振っている、まるで気がふれたみたいだ？　どうした？　死んでいるのに、何をおびえている。
僕はその方向に、ゲレンデを横切って行った。一瞬の隙を狙って何かが体当たりしてくる。身を交わした。メイを抱き直そうとした途端、メイを奪われてしまう。拓也だ。
「由川賢！　お前は包囲されている。すぐに下山して、相馬優香を引き渡しなさい！」
スピーカーが怒鳴っている。
ザーザーという音。表面の粉雪がふるふると生き物のように動いていた。ザーザーザー、ザーザー、足元で雪が動く。どこかでハッパの音がしている。
「由川賢！　お前は包囲されている。すぐに下山して、相馬優香を引き渡しなさい！」
スピーカーが怒鳴りつづける。
見上げると急速に張り出した雪庇が、立ち上がり、怪物になって襲い掛かる。瞬くと水玉は陰を引き連れて押し寄せてくる。轟音。視界が黒一色になった。
雪崩はメイを抱え込んだ拓也と、ゲレンデの下で構えていた人々を巻き込んで崩れ落ちていった。
ザーザーザーザー、ザーザーザー。震えながら、雪は流れ続ける。

どこかで雪崩の刺激で、スイッチの入ったラジオの声が特大になる。
「二日間燃えつづけた、秩父の山火事は漸く鎮火、焼失した林のなかから、焼死体と白骨死体が並んで発見されました。焼死体は経済ジャーナリスト大友雄三氏と判明、身元不明の白骨死体は、ＤＮＡ鑑定中であります……」

逃げようとする僕を、何かが引きとめる。美香が生きていたのだ。
僕はこの真っ白な雪のなかから、生を、命を探しあてる。マリアが笑っていた。
自由な一歩、おおらかな二歩。
僕は雲の上を歩いていく。

完